

ラブライブ！サンシャ
インR

χ—u—魚

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

これはスクールアイドルグループ・Aqoursが生まれず、浦の星が統廃合を迎えてから一年後の話

決して交わるはずのなかった彼女たちを引き合わせたのは、一台の軽トラと、一人の女子高生だった

※第2部からは毎週月曜日 0時投稿になります。

目次

第1話	輝きとの邂逅	1	第10話	モコ、復活	70
第2話	彼女の『日常』	9	第11話	謎のZ	79
第3話	初めての公道バトル	15	第12話	過去のわだかまり	87
第4話	決着！千歌対梨子	22	第13話	宣戦布告	95
第5話	↑天使たちの戯れ↑	30	第14話	ダイヤの秘策	103
第6話	↑天使たちの戯れ↑	30	第15話	激突！ダイヤ対鞠莉	112
第7話	↑その	38	第16話	大切なもの	120
式↑			最終話	これから	131
第8話	対決前夜、それぞれの思い	43	第2部	第1話	函館から来たふたり
第9話	リベンジマッチ	52	第2部	第2話	走る理由
	チュリー対クリッパー	61	第2部	第3話	S a i n t S n o w
	怪物の正体	61			149
					158

第2部	第4話	ともだち	168
第2部	第5話	千歌復活	178
第2部	第6話	決着、そして波乱の予	189
感			
第2部	第7話	憧れの的	201
第2部	第8話	ダイヤの執念	211
第2部	第9話	エキシビションマッチ	221
第2部	第10話	ヨハネ覚醒	230
第2部	第11話	逆襲	240
第2部	第12話	カレシ疑惑	252

第1話 輝きとの邂逅

ンバアアアアアアア… パアアアアアン…

ダイヤ「今宵も多いですわね、ルビィ」

ルビィ「うゆ、そうだね… 今夜の走り屋さん達はどう思う？ おねいちやあ」

ダイヤ「そうですわね、有名な言葉を借りるならば…」

「ジャリぞろい、ですわね」

ギャラリリー「おい、見ろよあれ！ ジュエリーシスターズのセンチリーじゃないのか!？」

ギャラリリー2「すげえ… 沼津の峠を制覇した伝説の走り屋、ジュエリーシスターズだ…」

ガヤガヤガヤ…

ダイヤ「さ、着きましたわよルビィ」

ルビィ「おねいちゃあ、運転ありがとう！」

ギヤラリー「うわあ、スゲエ美人…。あんなのにドラテクも一級品だなんて信じらんねえよ！」

ルビィ「暇つぶしに来てみたけど、やっぱりめほしい走り屋さんはいないね」

ダイヤ「そうですね、いつ来ても全く変わり映えしませんわ。まあ、その方がかえって落ち着くのですがね。」

今の私を満たしてくれる物はこの峠にはない。

それが分かっているにもかかわらず、憂さ晴らしなのか、輝きを追いかけたあの時の気持ちを忘れたくないからなのか…

今の私にはそれを確かめる術など、持ち合わせていない。ただ、騒がしくこだまするエキゾースト音と、流れ去っていくテールライトを眺めながら、私は3年前を思い出していた。

3年前、私は友人たちとあるひとつの輝きを追い求めていました。

ラブライブ。学生がユニットを組み、アイドルとして活動するスクールアイドルの頂点を決める大会。私達はその頂点の輝きを目指して、日々切磋琢磨していました。

ですが私達は結果として、ステージの上で歌えませんでした。いえ、歌いませんでした。怪我をしても、自分の未来の可能性を捨ててもラブライブに挑もうとする友人を

見ていらなかったから。

しかしそれが原因で私達はすれ違いを起こし、ユニットは解散になりました。

私は、自分の全てを投げ打って挑んでも叶わない夢、届かない場所があることを知り、そこへ挑むことの虚しさを感じました。程なくして、私は無免許で車に乗るようになりました。自暴自棄になっていました。この虚しさを忘れられるなら、どんな事だつてするど…。

ルビィ「おねいちゃあ、そろそろ帰る？これ以上はここにいても何も無いよ。」

ダイヤ「ここへ来てもう2時間ですわね…帰りましょうか。」

沼津一帯の峠を制覇してもなお、この虚しさは消えてはくれません。ああ、この虚しさは、いつになったら消えてくれるのでしょうか…。

ヴオオオオオオオ…

ルビィ「うゆ？何この音？聞き慣れないね、このエンジン音」

ダイヤ「？ええ、あまり聞いたことのないエンジン音ですわね…近づいてきてるみたいですし、確かめてみましょうか。」

!!!
ヴオオオオオオオオオオオバアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアア

!!!
「!!!」

ダイヤ「行きますわよ！ルビィ!!!」ボタン!!

ルビィ「お、おねいちゃあ!?どうしたの!？」

ダイヤ「早く!!!」

ヴバアアアアババババババ!!!

ギヤギヤギヤギヤギヤギヤ!!!!!!

ギヤラリー「ジュエリーシスターズのローンチコントロールだ!!!スゲエー!!!」

久しぶりにローンチコントロールなんてやってしまいましたわ。ですが、それほどまでにあの車は私の心を強く惹き付けたのですわ。私達の目の前を駆け抜けて行った白い流星の正体、それは…

軽トラですわ。

バアアアアアアアア!!!

ルビィ「ど、どうしちゃったのおねいちゃあ!こんなに飛ばして!」

ダイヤ「あの軽を追いかけてるのですわ。」

ルビィ「確かにあの軽トラしゃんけっこう速かったけど、おねいちゃあが相手するほどじゃないと思うよ!ストレートでスピードが乗ってただけだし!」

ダイヤ「…いいえ。あの軽は只者ではありませんわ。見た瞬間、身体中に電流が走りましたもの。」

ルビイ「け、軽トラしやんだよ!?いくらなんでもこのセンチユリーしやんに勝てるわけがないよ!」

ダイヤ「ツ!!…それは、走ってみてからでないと分かりませんわよ、ルビイ。」ニヤリ

あの軽トラの姿を捉えましたわ。日産のクリツパートラックですわね。ナンバーは…白!?…ああ、オリンピックナンバーですね。ですがこの車から発せられるオーラは、只者ではありませんわ!どこまでやれるのか、見せて頂きますわよ!!!

ヴオオオオオオオオオオ
 バアアアアアアアア
 ギャギャギャギイイイ!!!

フフフ、なかなかにやりますわね。ですがそれくらいでないと拍子抜けですわ。

しかし!この緩いコーナーの先はタイトな低速コーナーセクション!私のセンチユリーではパワーがあまりすぎて踏んでいけません、それは向こうも同じ!軽トラの車体と足回りでは、どうしても横Gで車体がロールして姿勢が崩れるため、踏んでいけない!さあ、どう切り抜けるんですの!

ヴオオオオ ヴアオツツ ヴアオオオオオ
!!!!

ギャギャギャギャ
!!!!

ヴアアアアアアア
!!!!

ダイルビ「?!?!」

ルビィ「どうしてあんなスピードで!!」

ダイヤ「コーナーをクリアしていけるんですのおお?!?!」

不可解ツ！不可解ですわ！あんなスピードで突っ込んでおきながら、リアを滑らせてはいなかった…ドリフトではなく、グリップでクリアした…あんなスピードで突っ込んだら、間違いなく横転クラッシュだよと…!!

ルビィ「見てた？おねいちゃあ…あの軽トラしやん、車体が全くロールしてなかったよ…!!」

「?!?!」

もしや、サスペンションのセッティングを変えている？いえ、軽トラなどの足回りはマクファアーソンストラット式…セッティングを変えたくらいで曲がついていけるわけがありませんわ…だとすれば一体何なのですか?!?くうううう！ますます理解不能ですわツ!!!

ルビィ「おねいちゃあ！もうすぐ峠が終わっちゃうよ！」

ダイヤ「ハツ！離されるまいと必死で、コースの現在地を失念していましたわ…」
 ダイヤ「大人気ないようで少々心苦しいですが、エンジンパワーに任せて、この先の
 ハイスピードセクションで取り返させて頂きますわよ！

吠えなさい！1GZオ!!!!」

バアアアアアアア!!!!」

ヴオオオオツ ヽヅオアアアアツ

ンヴアアアアアアア!!!!!!

ダイヤ「そんなツ?!?!」

ルビィ「ピギィ!!!!」

差が縮まるどころか… 離れていく…!!!

有り得ませんわよ…だってここはハイスピードセクション、しかもストレートです

わ…

それなのに、5リッターV12のセンチュリーが、たかだか660CCの軽トラに、加
 速勝負で負けるなんて…！

悪い夢でも見てるんですの!?それとも片バンク死んでしまったんですの!?

有り得ません… 有り得ませんわツ!!!

ルビィ「軽トラしゃん、すっかり遠くに行っちゃったね…」

「ダイヤ……ええ……久しぶりですわ……」
「ダイヤ「こんなにも心が踊るのは……！」」

第2話 彼女の『日常』

千歌「ふわあああああ〜〜」

曜「うわ、千歌ちゃん大きなあくびだね…。またお店の手伝い？」

千歌「そうなんだよお〜、お父さんも志満ねえも、こおーんなうら若き少女に朝早くからジユウロウドウさせすぎなんだよ〜」

曜「中学に上がってからずっとだっけ？大変だね〜。」

千歌「いいなあ曜ちゃんは。家族にこんな理不尽な使いつ走りさせられてなくて！決めた！私曜ちゃんの妹になる！」

曜「いつでも大歓迎であります！…。じゃなくて、そんな冗談言わないの！志満ねえたち悲しむよ？」

千歌「ええ〜〜：：。」

曜「そういえば部活、どうするの？静真に統合になってからまだ決めてなかったよね？」

千歌「う〜ん：：。そうは言っても、うちの手伝いあるしなあ〜：：。」
曜「：：。まあそうだよね、なんかごめんね？変な事聞いちゃって。」

千歌「いやいやいや！曜ちゃんが謝ることないよ！悪いのはうちの家族だから！もう
いっそ直談判するよ！私の代わりに美渡ねえをこき使ってくれって！」

曜「あはは！そんな事言わないの、美渡ねえに聞かれたらこっつり絞られちゃうよ？」
千歌「あ、それもそうか〜！」

曜ちゃんと一緒になにかできる機会、これでもう最後だもんなく〜：：。私達ももう高校
3年生だし：：。

なにか一緒にできること、ないかなあ〜：：。

”うちの手伝い”、一緒にやる？：：。いやいや流石にダメだよ！危ないし！あんなの
大事な友達にさせたくないよ〜：：。どうしよう、時間がどんどんなくなつてつちゃうよ
〜！

千歌「うわあ〜！〜ん！どうすりやいいの〜！！！！」

「あ、千歌じゃん。やつほ〜。」ドゥンドゥン！！

千歌「あ、果南ちゃん！」

果南「へえ、これが最後のチャンスだから、一緒になにかしたいってねえ。」ドゥンドゥン!!

果南「アルバイトとかやってみたら? って言っても、この辺じやまず募集ないもんね。」ドゥンドゥン!!

果南「まあでもあたしからも、卒業してからも頻繁に会ってるからそんな心配することないんじゃない?」ドゥンドゥン!!

千歌「…ごめん、全然聞こえない:~:」

果南「え? なんて?」

千歌「きーこーえーなーいーいー!!!」

果南「あ、ああく!」ドゥンドゥン:~:

千歌「いっつも思うんだけど、果南ちゃんの車派手すぎだよ! なんかいつも光ってるし、ユーロビート? って言うんだっけこういうの? ずっと大音量で流れてるし、何より見た目が怖い! 夜中のドンキにいるヤンキーと変わんないよ!」

果南「ええ、そうかなん? 私これ結構気に入ってんだけどなあ。特にこの、でいーえーでいーってやつ。なんかカツコイイじゃん。」

千歌「ヤンキーみんな貼ってるよこれ! 果南ちゃん穏やかなのにこういうところだけ何か飛び抜けてるよね。」

果南「いいじゃん、ギャップ萌えてカンジで？よく知らないけどさ。」

果南「そういうばさ、”うちの手伝い”の方はどうなの？夜中にやっでんてしょ？」

千歌「相変わらずきついよ！あれだけやってたら道も覚えちゃうけど、とにかく眠いんだもん！居眠りしないようにするのが精一杯だよ……」

果南「ほうほう、それで”あのレベル”なんだ、……恐ろしいね。」

千歌「え、どうしたの？」

果南「なんでもないよ。それよりほら、家着いたよ。」

千歌「ほんとだ！送ってくれてありがとう！」

果南「ちゃんと今度遊びに行くね！」

果南「うん、いつでも来な。基本暇してるから。」

千歌「分かった！じゃあね！」

ブオオオオオオオ……ドゥンドゥン……

ピピピピ　　ピピピピ　　ピピピピ

千歌「……んえ……あ、配達……」

千歌「ほはほよ」アクビ

志満「千歌ちゃんおはよう。今日も頼むわね。」

千歌「うくん。分かった。」

今日もみかんいっぱいだなあ…。眠気覚ましにいつこたーべよ…。！
美味しく！眠いけど、今日も頑張るか！

キュキュキュ…。ヴォウ!!ドウドウドウ…

エンジンの調子は…。つと

フオオン!!フオオン!!フオオオオン!!!

よし、大丈夫そう。じゃあ今日も行きはゆっくり、帰りは超特急で!

千歌「全速前進、ヨーソロー!ってこれは曜ちゃんか。」

ヴォオオオオオツ ヴアオオオオオツ ヴアオオオオオオ…

「そう…。あれが…」

曜「あはは、千歌ちゃんまた眠そう。今朝もお疲れ様であります!」

千歌「でへへ…。曜ちゃんの笑顔が眩しくて癒されるよ…」

曜「うわあ、なんかオジサンみたい!」

千歌「ええっ?!? 曜ちゃん酷いよ〜! 私18歳だよ!?!」
アハハハハハハ!!!

「高海さん、ちよつといい?」 トントン

千歌「うえっ、なに?」

桜内「私とね、バトルして欲しいの。」

第3話 初めての公道バトル

千歌「…へ？ぼとる？」

曜「えっ、なにそれ？」

桜内「私は桜内梨子。詳しい事は後で話すから、放課後校舎裏に来てもらえる？
じゃ。」スタスタ

曜「千歌ちゃん、バトルってなに!?格闘技とか習ってたの!?!」

千歌「いやいやいやそんなわけないじゃん!やるんだったら曜ちゃんも誘うし!」

曜（えっ、それって…）

千歌「それより、あの桜内さんって人だよ!多分誰かと勘違いしてるだろうから、放
課後誤解といってくるよ!」

曜「いや、案外分かんないかも!実は千歌ちゃんの知らないところで、桜内さんの恋

敵に… とか！」

想像桜内『高海さん。貴方は私にとって邪魔です。貴方がいるとあの子が私に振り向いてくれないの。だから今ここで決着を付けましょう… いざ！』

千歌「何そのラブコメみたいな展開！もしホントだったら笑えないよ〜！」

―放課後―

千歌「あの〜桜内さん、バトルってなんの事ですか？」

桜内「単刀直入に言うわね。私と、車でバトルしてほしいの。あなた、車に乗ってるでしょ？」

千歌「う、うん…（えええええ〜！なんで私が車に乗って配達してるの知ってるの〜!?!）」

桜内「見たのよ。あなたが車を運転してどこかへいくのを。それであなたが只者じゃないってすぐに分かったわ。」

千歌（なんかこの子、すぐグイグイ来るなあ…）」

桜内「別に断ってくれてもいいのよ？私のワガママだし。」

千歌「あつ、じゃあ遠慮しときm

桜内「でもその代わり、あなたが無免許で車に乗ってること、学校にバラしちゃうかも。」

千歌「……分かった、バトルするよ。」

桜内「話が早くて助かるわ♥じゃあ、金曜の夜にいつも通ってる峠でね！」タタタツ

千歌「選択肢ないじゃん……」ヘナヘナ

ルビイ（金曜の夜にバトル……！絶対面白いよ！おねいちやあに知らせなきや！）

曜「それでどうなったの？あの子とは。」

千歌「それがさく、勘違いじゃなかったし、バトル受けるしなくなっちゃったんだ
よ……」

曜「ええく!?バトルの内容ってどんななの!？」

千歌「それなんだけど、ごめん!どうしても言えないんだ!色々と事情があつて……
曜（えっ……）」

曜「そ、そうだよね〜!校舎裏で話すぐらいだもん、そりや聞いちゃまずいよね〜!」

千歌「曜ちゃん、ほんとごめんね!」

曜「い、いいよ〜!……」

小さい頃からずっと一緒にいた千歌ちゃんが、私に言えない隠し事をしてる…
私の知らないところで、千歌ちゃんが一人で戦おうとしてる…
私って、そんなに役不足なのかな…

ダイヤ「当ッ然!! 見に行くに決まってますわよ! 非常に興味深いですわ!」
ルビィ「えへへっ! きつとおねいちゃあが喜ぶと思っただなあ!」
ダイヤ「んまー可愛い妹でちゅわね〜!」

果南「へえ〜、千歌がバトルかあ。初めてなんじゃない、そういうの?」

果南「ま、美渡ねえと志満ねえの特訓がどれくらい身についてるか、確かめるにはちよ
うどいいんじゃない?」

千歌「果南ちゃん、なんの話してんの?」

果南「ん〜? なんでもないよ? (折角だし、見に行ってみるかあ)」

曜(千歌ちゃんに、こっそりついて行ってみようかな)

ガヤガヤガヤ：．

ダイヤ「いつもと変わらないところを見ると、ほかのギャラリーは何も知らないようですわね。しかし、思いの外早く着きすぎましたわ：．」

ルビィ「ルビィも、ワクワクしすぎて授業に集中できなかつたよ〜！」

ダイヤ「ところでルビィ、ひとつ聞きたいことがあるんですけど。」

ルビィ「うゆ??」

ダイヤ「そのトヨタ アリストはもしや：．」ワナワナ

ルビィ「うゆっ!!おばあちやあの形見だよっ!!」キヤツキヤツ

イエローフォグ交換

フルストレートマフラー

ローダウン

フルエアロ

ダイヤ「んま〜〜〜〜〜っ
!!!!!!」

果南「お、賑やかだねえ〜」

果南「まあ金曜の夜だし、人は多いよな〜… って、あれ…」

果南「ダイヤじゃん…」

桜内「高海さ〜ん！こつちよ〜！」

(あ、いた) ペコリ

桜内「この時を心待ちにしていたの。すごくワクワクしてる！」

千歌「こちらこそ、よろしくお願いします…」

桜内「じゃあ早速ルール説明をするわね。」

あのコーナーを曲がったところでスタートするわ。先行後追い形式で、どっちかが突き放すか追い越すまで上りと下りを繰り返しアタックする。それでいいかしら？」

千歌「え、あ、うん、それでいいよ！」

(どうしよう、専門用語多くて分かんなかった…)

桜内「… 後追いはあなたに譲るわ。きつと高海さんなら私についてこれると思うから。」

千歌「そうなんだ〜、ありがと〜！」

(ありがたいことなのかな?)

桜内「じゃあそろそろ始めましょうか。これはバトル、手加減は無しよ？全力でお願いね。」

千歌「分かった。全力で走るよ！」

バタン

千歌「とは言ったものの、ルール分かんないから手加減も何もできないよ！後追いだから、私が桜内さんを追い越したら勝ちってことでいいんだよね？」

桜内「ついてこれるとは言ったものの…正直大人気ないわよね。だって向こうが60CCの軽トラなのに対して、こっちは1.3Lターボですもの。車体構造もまるつきり違うし…」

桜内「ま、このバトルを受けたのは高海さんの方だし、手加減してあげる義理もないから卑怯だろうとなんだだろうと全力で行くだけよ…私とこの、ZC33sでね！」

第4話 決着!千歌対梨子

ブオオオオオオオオオオツ パシユン!

桜内「フフツ、しつかり着いてきてるわね…。そうでなくちゃ。」

やっぱり期待通りの走りをしてくれる。私も高海さんも無免許。家は隣同士だし、こんな偶然ってあるかしら?

そもそも私が無免許で車を運転するようになったのは、内浦に引越してきてからだった。当時の私は得意だったピアノでスランプに陥って、学校の雰囲気についていけなかった。インスピレーションを養うためと、一度ピアノから距離を置くという意味で自然豊かな場所で暮らすことにした。でも私のスランプは続く一方だった。ストレスが溜まる中で、ほんの好奇心から、うちで使っている車…。このスイフトスポーツにこっそり乗ってみた。うちのはATだったから、運転に慣れるまでそう時間はかからなかった。

とても楽しい!

乗りこなせるようになってきて初めに思ったことだった。誰かに見つかるのが怖くて夜しか運転してなかったけど、月明かりに照らされる内浦の海を見たり、夜景を見に

行ったりもした。でもそれ以上に、鉄の塊を操るという爽快感がたまらなかつた。初めてピアノを触った時に覚えた感動ととてもよく似ていた。自分の意のままに音を紡ぐことが出来るピアノと車の性質が似ていたからなのかもしれない。

私はそのうち、峠に足を運ぶようになった。スイフトスポーツは軽くて小さくて、だけどパワーがしつかり出るエンジンを積んでいるから、峠をとてもし走りやすかつた。コーナリングやブレーキングの際に全身に掛る横Gが心地よいくらいだつた。この車とならもう誰も怖くない！私はそうやってスイフトスポーツにのめり込んで行つた。そして、走ることを心から楽しんでいた。

そんな時だつた。私の目の前に高海千歌さん、あなたが現れたのは…

ブオオオオオオオオ!!!

ヴァオオオオオオオ!!!

千歌「ちよつと車間近いかなあ？桜内さんに何かあつた時が怖いから開けてるけど…でも追い越さないと負けちゃうしなあ…」

千歌「よし！ちよつと先のくねくね道で追い越そう！あそこ走るの自信あるんだよねー！」

桜内「もう少ししたらギヤラリーのストレート、そしてそこからまた少し行けば中低速セクシヨン。いくらあなたの車が軽トラで軽いからって、パワーがなければ私に勝つ

ことはできないわよ!このまま2本目に持ち込んで、上りのパワー勝負で決着を付けるわ!」

ザワザワザワ…

… オオオオン…

ギャラリ―「おい、なんか来るぞー!道開けるー!!」

ダイヤ「いよいよ来ましたわね、注目のバトルですわ。」

ルビィ「どんなバトルになってるんだろう!楽しみだね!」

果南(千歌)… あんなじゃじゃ馬を5年乗って、どれほどの腕になってるか見せてもらうよ)

桜内「さあ!このストレートで一気に引き剥がすわよ!ついてこれるなら来てみなさい!」

キュウウボアアアアアアアアアア

千歌(あつ、桜内さんがスピードあげた!)

千歌「それならこつちも!」

ヴオオオオアアアアアア

ギャラリ―「2台突っ込んできたア!」

「ダイルビかな!!!」

ルビイ「スイスポしやんと!!!」

ダイヤ「あのクリツパーですわあー!!!」

桜内（付いてきた……!?まさかそんな……有り得ない、きつと私の踏み込みが甘かったんだわ……この先の中低速セクションでキツチリカタを付ける!）

千歌（よおーし、もうすぐぐねぐね道だ!桜内さん、覚悟ーっ!!!）

ブオオオツ　パシユブオオツ　パシユブウオオオ!!

ヴァオオヴァオオヴァオオオオ!!!

千歌「行けるっ!今だ!」

桜内（こんなコーナーでオーバーテイクですって!?!）

桜内「させないわよ!」クンツ!!

ギヤギヤツ

千歌「邪魔してきたら!?!」グツ

ギヤギヤギヤツ!

桜内（危なかった……でもどうしたこと!?!コーナリングスピードが明らかに私よりも

速かった……！スイフトでもかなり横Gかかるコーナーリングなのに、それでなんでクリアできるの!?)

千歌「もおく！ぶつかりそうだったじゃん！次こそは追い越してやる！」

ヴァオオオオ ヴァオオオオ!!!

ギャギャギャギャ!!!

桜内「また来た！」クンッ！

千歌「げえ〜！また塞がれた！ならもう一回！」

桜内（ありえないわ……リッターオーバーのターボ車が、ただの軽トラに突っつかれてる!?)

さっきのストレートしかり、やっぱり何かがおかしい！この車の不調？そんなはずはないわ、だつてそれならこの峠へ来るまでに気付くはずだもの…… とすると、こっちの不調ではなく、向こうに何かとんでもないカラクリがあるっていうの!?)

千歌「んもく怒ったぞ〜！おこりんぼ大会だ〜!! S字カーブで絶対追い抜いてやるんだもん！」

桜内「この先はS字コーナー……進入で向こうのアタマさえ押さえ込んでしまえばやり過ぎせる！」

ヴァオオオオオオヴァオオオオオオオ!!!

桜内「!?!」

離れた…減速タイミングが早い!?ローパワー車で立ち上がり勝負するつもり!?

千歌「行つけえええええ!元氣全開だあああああ!!!」

ヴォオオオオオアアアアアアアア

桜内「アウトからツ…!!」

速い!?

しまった、ブロツクが間に合わない!

ヴァアアアアアン!!!!

桜内「追い…抜かれた…」

ほんの一瞬だった。減速が早いことに一瞬気を取られた。アウト側にラインを取ったと思った時には、既にブロツクできない距離まで詰められていた。S字コーナーではインとアウトが入れ替わるけど、私はものの見事に走行ラインから押し出される形になった。

あの軽トラが只者ではないことに気付いていたはずなのに、『立ち上がり勝負で勝てるわけがない』と、一瞬でもタカをくくった私の負けだ。

完敗だわ…高海さん…

千歌「もおく!もう少しでぶつかりそうだったじゃん!危ないよ!」

桜内「ごめんね?でもバトルってそういうものだし:」

千歌「ああ、そっか!そういうえばバトルしてたんだっ!あつははは:」

桜内「でもすごいね。あのS字コーナー、あんなに見通しが悪いのにあんな速度で抜けていこうだなんて、普通だったら思いつかないわよ?」

千歌「うーん、でももう5年も走ってるし道がどんな感じかなんて覚えちゃってるんだもん。」

桜内「5年!」

千歌「はっ、しまった!あんまり人に言っちゃいけないんだっ!」

5年もこの道を走ってて、あんなキレイな走りができるのに、車をおりるとどこにでもいる女子高生と何ら変わりなくなる:」

梨子「ほんと: 変な人ね:」フフツ

千歌「あく!それどういう意味?!」

梨子「なんでもないわよ♪それより、梨子でいいよ、名前。」

千歌「分かった!じゃあ私も千歌でいいよ!よろしくね、梨子ちゃん!」ダキツ

梨子「えっ、ええええ?!?!?!」
//
//
//

ー少し前ー

キコキコ…

千歌ちゃん、バトルするって言うから出かけるだろうとは思ってたけど、まさか車を運転して出かけちゃうなんて…

千歌ちゃんが車を運転できるなんて知らなかった…ずっと一緒にいたのに…

曜「確か、こっちに行ったよね…」

『あ〜！それどういう意味〜!?!』

千歌ちゃんの声？あの駐車場からだ…

誰と話してるのかな？

『よろしくね、梨子ちゃん!』ダキッ

曜「そんな…どうい事…?」

第5話 †天使たちの戯れ†

カタ：… カタカタ：

「フフ… ククク…！時は満ちた… さあ、今こそ我が力を解放する時…！」

カタカタツターン!!!

『来店予約が完了しました』

「あとは我が眷属が召喚されるのを待つのみ…」

「ふう… あ、ママ…！この車でよかつたんだよね？」 ドタドタ バタン！

メルセデス・ベンツ SL55 AMG

花丸「ずらあああああああ…」

ルビイ「どうしたのヘナールチャア、そんなにため息ついて」

花丸「オークションでまたブロックされたずら… マルはただ質問を送っただけずら！酷い輩ずら！」

ルビイ「へ、へえ、ちなみになんて送ったの？」

花丸「これを見るずら！」ズイツ

Z R M R 『恐縮ですが質問させていただきます。こちらのEJ20エンジンは以前スバル インプレッサスポーツワゴンで使用されていたと書かれておりますが、日産 モコに搭載は可能でしょうか？お返事頂けると幸いです。』

出品者 『逆になんで載ると思うんですか？』

この出品者にメッセージを送ることはできません

ルビイ（日産モコにEJ20エンジンを積もうなんて、ヘナールチャア、気でも触れちゃったのかな）

花丸「もうこれで5件目すら…なんでこんな簡単な質問しただけで突っぱねられる
ずら…世間は世知辛いずら」

ルビイ（どう考えても乗るわけないって気付かない方もなかなかだよ、ヘナール
チャア…）

花丸「オラのモコに今必要なのは絶対的なパワーずら！圧倒的なトルク！そこから生
み出される加速力！パワーずら…パワーずらああああ!!!」

ルビイ「ピギイ！ヘナールチャアがついに壊れちゃったよお！」

担任「ホームルーム始めるので席に着いてくださーい。出席を取ります…つて、津島
さんは今日も来てないのね…。」

花丸「善子ちゃん…」

―昼休み―

ルビィ「あ、そうだヘナールチャア！最近ね、峠に面白い車が来てるんだよ！」

花丸「面白い車？」

ルビィ「そう！見た目はただの軽トラなんだけど、ものすごく速いんだ！おねいちゃあのセンチユリーでもちぎられちゃったんだよ！」

花丸「ダイヤさんのセンチユリーがちぎられたら!?にわかには信じ難いすら。それは是非とも見てみたいすら！」

ルビィ「でしょ！だから今週末の夜、一緒に峠行こ？」

花丸「あくでも、オラのモコはエンジンの調子悪いから。もしその軽トラと会えても走れないすら。」

ルビィ「大丈夫だよ！ルビィが迎えに行くから、横乗りしてもらえれば一緒に行けるから！」

花丸「ずら？ルビィちゃんって車持ってたっけ？」

ルビィ「ふっふーん！それは今週末のお楽しみだよ！」

善子ママ「ありがとうね、善子。あなた学校行つてないからつてこのまま引きこもりになつちやうんじゃないかって、母さん心配してたのよ。」

善子「ママには浦の星にいた時から迷惑ばかりかけてるから… 学校には行けてなくても、自分の力で生きていけるってことを証明したかったの。」

善子「その証明としてこの車をママにプレゼントするわ！」

私、墮天使ヨハネは学校へ行っていない。この世に生まれ落ちたその瞬間から、この世の叡智を授けられたから行く必要などないのよ。決して周りに馴染めなかったとかじゃないわ。もし仮に、万が一そうだったとしても、墮天使という存在は元来孤独なもの… 一人で生きる運命にあるのよ…。

しかしこの世界での私は仮にも学生。私は同居人に己の力を見せるため、リトルデーモンのアーティファクト、スパチャを使って同居人に車を買って与えたわ。実に2年… 墮天使の寿命からすればほんの一瞬だったわ。車はよく分かんなかったから、べんつとかいう高級車にしたわ。

善子ママ「ありがとうね… 善子！大切にするわ！」ウルウル

善子「ツ… !!うん!!」

… いけないいけない。危うく絆されるところだったわ。

ヨハネが車を手に入れた目的は、本当はもう一つあるのよ…。

キユキユキュ　　フヴオオオン!!!

善子「フフフ：：：墮天使は夜の漆黒の闇でこそ、輝けるといふもの：：：いざ！約束の地、ラグナロクへ！」

フウウヴオオオアアアアアアアア
!!!!

花丸「ルビイちゃん、迎えに来るつて言つてたけどどうやって来るんだろう：：：いつもダイヤさんのセンチユリーに横乗りしてただけだったのに。」

：：：バアアアアアアアア
!!!!

花丸「遠くでもうるさいぞらねえ：：：こんな夜中にど直管で走ったら警察呼ばれることくらい察しろずら：：：」

バアアアアアアアアア
!!!!

花丸「つて、音がだんだん近づいてくおずら：：：まさか：：：！」

バアアアアアアアアアアアアアアア
!!!!!!

ルビイ「花丸ちゃくく!!!」

花丸（げええ!!音の正体はルビイちゃんだったずら：：：！）

ブアンブアンブアンブアアアババババ
!!!!!!

ルビイ「迎えに来たよく!!!」

花丸「わ、分かったから人の家の前でレブ当てるのはやめようね…」

バアアアアアアアア…

花丸「それにしてもアリストなんて、どこから引つ張ってきたずら？」

ルビィ「おばあちゃんあの形見だよっ！おばあちゃんあのモコで魔改造してるといって、すつごくキレイなんだよ！」

花丸「おばあちゃんの形見でこんなことしてるずらか… だいぶバチあたりずらね」

ルビィ「ヘナールチャアだっっておばあちゃんあのモコで魔改造してるといって、すつごくキレイなんだよ！」

花丸「マルのおばあちゃんはまだ死んでないずら」

ルビィ「そんな事より！今夜もあの軽トラ来るといいね！」

花丸「そうずらね、センチユリーを振り回して沼津一を取った、あのダイヤさんをちぎる」

ほどの腕前、絶対に見てみたいずら…！」

ガヤガヤガヤ…

ヴオヴオヴオヴオオ…

バタン

善子「着いたわね……約束の地、ラグナロク……」

同居人の車が小さな軽だった時からヨハネはここに足繁く通っている。人の道を外れた墮天使たちが夜な夜な集うこの場所が、とても心地よい。皆、夜の闇の中でこそ輝ける夜の眷属……墮天使ヨハネもその一人であるッ!!

でも流石に鉄馬を駆る墮天使たちには辟易したわね……なんて言つてたつけ、確か『繚乱式死牙裂愛弗同好會』だったかしら……まあでも、そんな並外れたアウトローすらも包み込むのが夜の闇の素晴らしいところ……

……バアアアアアアアア!!!

今宵もまた、闇に飢えた墮天使が来たわね……

「今日も来るといいね、あの軽トラ!」

「そうずらねえ……もし来たら追走お願いするずら!」

ずら……ずら丸!? なぜここに! 墮天使ヨハネの過去を知りし者! 気づかれる前にここから行方をくらまさないければ! いやしかし間に合わない……ならば! 闇の精霊の力を借りてこの夜の闇に溶け込む術式? を使えば……! となれば詠唱を! 我が名は墮天使ヨハネ……数多の闇の精霊たちよ……我にその力を与え、我の糧となれ……」ボソボソ……

ルビィ「：：あの人何言ってるんだろう：：」

花丸「シツ！聞こえちゃうぞらよ！ああいう手の人は近づかないことが：：
って、」

「善子ちゃん？」

第6話 †天使たちの戯れ† †その式†

善子「何だ?!?我が術式をいとも簡単に見破るとはなかなかやるわね…。しかも我が名はヨハネ! って…。ずら丸?!?いつの間にかここまで!?!」

花丸「面白い車を探して歩いてたら、駐車場の隅でブツブツ言ってる人がいたから気になったずら」

ルビィ「うゆ、ヘナールチャアこの人と知り合いなの?」

花丸「ずら。この子は津島善子ちゃん。オラの幼稚園の時の知り合いずら。クラスで一人だけ来てない子いるずら?あの子ずら。」

ルビィ「ど、どうも…。黒澤ルビィです…。」

善子「我が名は墮天使ヨハネ…。この夜を司りし者…。」

花丸「善子ちゃん、浦の星の時からずっと学校来てなかったから心配だったけど、元氣そうで良かったずら」

善子「善子じゃなくてヨハネ! 我が力の源は闇と負のエネルギー。学校などという檻の中では生まれぬ…。」

ルビィ「善子さん、ここに來てゐるってことは峠も走るんですか?」

善子「善子じゃなくてヨハネ！私は墮天使たちのロンドを観賞する者…舞台には立たないわ。」

花丸「AMGに乗っててそれは勿体ないすら。スペックだけで言えばここにいる車の中ではダントツすら。」

善子「AMG？何それ？べんつつて言われたから買ったんだけど？なつ、もしや詐欺…!?ククク…この墮天使ヨハネともあろうものが、小賢しい人間の罠にハマるとは…墮ちたものね…」

ルビイ「墮天使だったらもう墮ちてるんじゃ…」

善子「うげツ…う、うっさいわね！」

花丸「ボロ出して恥ずかしいすら。それに詐欺じゃないすら。これはベンツの中でも更に上級のブランド、より速く走ることに重きを置いた、スポーツブランドすら。」

善子「つまり、特別…ってこと？フフフ…やはり墮天使ヨハネ、特別な者同士惹かれ合う運命にあるんだわ！」

ルビイ「ちよつと変な人だけど、悪い人じゃなさそう…」

花丸「そうすら。色々と見ててきついところはあるけど、実はとっても優しいすら。だからルビイちゃんも善子ちゃんと仲良くしてほしいすら。」

善子「私が優しい…？フフ…そんな言葉をかけられたのは一体いつぶりかし

ら…… そうね、あれはまだ私が下界へ落ちる前だったかしら？あの日もこんな夜だったわ……」ブツブツ

ルビィ「よ、よろしくね！善子ちゃん！」

善子「善子じゃなくてヨハネ！でもそうね…… 貴方を私のリトルデーモン2号にしてあげるわ……」

ボオオオオオオオオ……

花丸「今日は来なかったずらね、噂の軽トラ。」

ルビィ「うゆ…… でもいいんだ！軽トラには会えなかったけど、代わりに新しいお友達もできたから！」

花丸「そうずらね。善子ちゃんもあんな感じだけど、裏では多分すごく喜んでると思うずらよ。あんな性格だからあんまり人が寄り付かないし、そもそも善子ちゃんが人と関わるのが得意じゃないから……」

ルビィ「そうなんだ…… ルビィ、花丸ちゃんと善子ちゃんと一緒に学校でたくさんお話したいな！」

花丸「善子ちゃんもだけど、ルビィちゃんは今もともっと優しいずらね。マル、ルビィちゃんと友達で良かったずら。」

ルビィ「え、そう!? それほどでもないよお〜!」グググッ

ボアアアアバアアアアアアア

!!!!

花丸「そ、その調子でもうちよつとご近所さんにも優しくできたらなお良いぞら..」

久しぶりに、人と話したな..

あんな変なことばかり言つて、普通だったら気味悪がられてもおかしくないのに、あの二人は最後までずつと変わらず接してくれた..

また、会えるといいな..

善子「そろそろ帰るか..」

フヴオオオン　フヴオオオン　フヴオオオアアア!!!

フヴオオオオオオオ..

善子「少し遅くなりすぎたわね..　ふあ..　少し眠いわね、ゆつくり帰ろ..」

チカッ　チカチカッ

善子「?..　何かしら、後ろの車?」

チカチカッ　チカチカッ

善子「なに：： 退けて事かしら？ 分かりましたよー、 っと」

ウウヴオオオオオオオオ

うわ、すごいスピードで追い越して行ったわ：： それにしても随分シャープなデザイン

の車だったわね、エンブレムはLのマークで高級感漂う感じ：： セレブでも乗ってるのかしらね。

「沼津：： 久しブ〜リデスね〜♪」

ウウヴオオオオオオオオ
!!!!!!

第7話 対決前夜、それぞれの思い

久しぶりに、この番号に電話をかける。昔はいつも一緒にいたのに、今では電話どころかメッセージすら送らない。いつからこうなったのだろう。

本当は分かっている。きっとあの日から、心は離れ始めていた。離れ始めた心をもう一度つなぎ止めてくれる存在は、1台の軽トラだった。

『お久しぶりですわね、果南さん。』

果南「久しぶり。実はダイヤに話があるんだ。」

ダイヤ『数年も話さなかったのにこんなタイムミングで電話をかけてくるんですもの、余程のことなんでしょうね。』

果南「ダイヤ、あのクリツパートラックとバトルしてみたくない？」

千歌「ジュエリーシスターズ？」

梨子「そう。私も詳しくは知らないんだけど、あの峠を拠点にして、沼津の峠を制覇したすごいドライバーがいるんだって。千歌ちゃんなら見たことあるかなって思った

んだけど。」

千歌「そうは言ってもなく、私、人と走ったのこの前梨子ちゃんとか初めてなんだよ。」

千歌「それ以外はいつつも朝早くに運転してるから、そういう人たちと会うことは少ないんだよね。」

梨子「そうなんだ。千歌ちゃんすごく運転上手いから、もしかしたらその人たちと競つたら勝てちゃうかもしれないと思つたんだけどね。」

千歌「やだなく、そんな褒められるほどの事じゃないよ！」ニへニへ

梨子「本音は顔に出てるけどね？」

千歌「ええ？そうかな？そんな事ないよ！ねー曜ちゃん！」

曜「……」ボー

千歌「曜ちゃん？曜ちゃん？」

曜「……」ボー

千歌「曜ちゃんが一番好きな制服は？」

曜「水兵さんのセーラー服……ハッ！どうしたの千歌ちゃん？」

千歌「それはこつちのセリフだよ。どうしたの曜ちゃん？なんか元気ないよ？」

曜「う、ううん!!なんでもないよ！ちよつと最近部活が忙しくてね！」

千歌「そつかく、あんまり無理しないでね？」

曜「・・・うん」

梨子「……………」

千歌「あ、果南ちゃんからメッセージきてる。放課後松月集合かく。暇だしいつかおつけー、わかつたよ、つと。」

梨子「どうしたの？」

千歌「んく、友達から放課後に呼ばれたんだ。ちよつと話すことがあるから来てつて。曜ちゃんと梨子ちゃんも来る？」

梨子「ええ？いいの？込み入った話かもしれないのに。」

千歌「大丈夫でしょ。そんなに大事な話するような人じゃないし。曜ちゃんも行く？」

曜「・・・いや、私はいいかなく」

梨子「いや絶対行きましょ！」グイッ

曜「うえっ!?!」

梨子「千歌ちゃんも大丈夫って言ってるから。だから行きましょ？」ゴゴゴゴ・・・

曜「桜内さん・・・圧が強いよ・・・」

梨子「そう？気のせいだと思うけど。あと、梨子でいいよ。」

曜「は、はいい……」

千歌「やった！じゃー決定！」

―松月にて―

千歌「……………」

梨子「……………」

曜「……………」

ダイヤ「……………」

果南「早速なんだけどさ千歌、ダイヤとバト」

ダイヤ「ちよつとお待ち頂いてもよろしくて!?!」

ダイヤ「聞いてた人数とだいぶ違うのですけれど!?!」

果南「だねえ。まあいいじゃん、そんな大した話じゃないんだし。」

ダイヤ「電話越しにあれだけ重苦しい雰囲気で切り出しておきながら、ちよつと能天気すぎませんこと!?!」

千歌「果南ちゃんって、昔つかから何か考えてるようで何も考えてないこと多いんです

よねゝ」

ダイヤ「ええ、確かにそうですわね。長い付き合いなのに、この人のアイデンティティとも言える部分を失念してしまいましたわ。」

果南「ええ、長い付き合いなのに忘れられちゃってるのちよつと傷つくなく。」

ダイヤ「長い付き合いと言いながら、2年ほど連絡を取らなかつたのはお忘れですの？」

果南「長い付き合いって先に言い出したのはダイヤじゃんか。」

ダイヤ「うぐつ……何も考えてない割には痛いところを突いてきますわね……！」

千歌「なあんだ、2人とも仲良いんじゃない！」

果南「そうでしょ？ダイヤとは長い間話さなくても阿吽の呼吸なんだよ。」

ダイヤ「黙らっしやい！」

ようりこ（私たちは何を見せられてるんだろう……）

ダイヤ「コホン。先程は取り乱してしまい失礼しましたわ。黒澤ダイヤと申します。よろしくお願ひしますわ。」

千歌「高海千歌です！よろしくお願ひします！」

果南「自己紹介も済んだ所で、本題に入ろうか。千歌。ダイヤと車でバトルしてほし

いんだ。」

千歌「それはいいんだけど、どうして？別に私じゃなくても他にあそこ走ってる人はいっぱいいるのに。」

果南「いや、千歌じゃないとダメなんだよ。これはただのバトルじゃない。千歌とダイヤ、両方の実力を見定めるためのものだからね。両者とも運転の腕は同じくらいだから。」

梨子「ちよつと待ってください。」

果南「お、どうしたのかなん新顔ちゃん。」

梨子「桜内梨子です。千歌ちゃんとは一度走ってるので分かるんですけど、千歌ちゃんのレベルはかなり高いと思います。少なくともあの道ではトップレベルだと思います。ダイヤさんには失礼ですが、到底かなうレベルではないかと。」

ダイヤ「む…。」

果南「そうだね。もしダイヤが並の腕なら間違いなくなわなない。でも梨子ちゃん、君もこの『地域』を走ってるんなら一度は聞いたことあるんじゃないかな？」

梨子「?…!!」

果南「気付いたね。そう。ダイヤは沼津最速の、『ジュエリースターズ』の異名を持つてる。」

果南「スイフトスポーツ戦で偶然ダイヤを見かけた時、ダイヤの顔はすごく輝いてた。久しぶりにあんな顔を見たよ。そして確信した。ダイヤはもつと成長できる。千歌にはそれができる。そしてそれは逆もまた同じこと。お互いがお互いを成長させることができるんだよ。」

果南「だからこれはただのバトルじゃない。2人とも、今自分がどこにいるのかを確かめ、
更にも上を目指すためのきっかけ作りなんだよ。」

結果としてこのバトルを千歌は快諾してくれた。私なりに最もらしい理由を作るのに苦労した。互いを切磋琢磨させるためなんかじゃない。はつきり言って、さらに上を目指したところで、その先になにかあるのかと言われても肯定できない。

これは私の単なるエゴでしかない。
本当は。

本当は、ダイヤの輝いた瞳を見たいだけなんだ。

3人で、同じ場所をひたすらに追いかけていた時と同じ、あの輝きを……

ついていけなかった。

同じ場所にいたのに、あの場所にいた皆がどこか遠くにいるみたいで、あの場においてよかったのか分からなくなる。車とか、沼津最速とか、私にとっては全然訳わかんなかった…

梨子「曜ちゃん。」

曜「さくら… 梨子ちゃん…。」

梨子「ひよつとして、『みんなの話題についていけなくて、仲間はずれにされたかも』って思っただけ？」

曜「あはは…。」

梨子「今はそれでいいの。というか、無理に分かろうとしなくていいの。」

梨子「曜ちゃんは千歌ちゃんのそばにいてあげるだけ、それで良いんだよ。たとえ今は何もできなくても、いつか必ず、千歌ちゃんが曜ちゃんの力を必要とする時が来るよ。」

梨子「じゃなかったら曜ちゃんのこと、初めから誘ってないはずだよ？ 曜ちゃんを誘ったのは、そばにいて欲しいからだよ。だからそんなに自分を責めないで。」

曜「… すごいや、梨子ちゃんは…。」グスッ

曜「私のこと、全部お見通しなんだもん…。」

梨子「打ち明け話するけどね、私、浦の星にいた時からふたりがずっと羨ましかったんだ。いつでも一緒に、息もピッタリなふたりが。」

梨子「今までそんな深い仲の人っていなかったから、そうやってどんなことも共有できるふたりみたいになりましたかっただ。」

梨子「だから、こうやってふたりと繋がりができて、とても嬉しいの。だから、二人の支えになれるならどんな事だっただい。」

曜「梨子ちゃん……私、梨子ちゃんのこと誤解してたよ……。ありがとう……。」

梨子「泣かないで。今度のバトル、絶対に二人で応援しに行きましょう？」

曜「うん！絶対行くわ！」

第8話

リベンジマッチ

センチユリー対クリッ

パー

ガヤガヤガヤ：

「おい聞いたかよ！ ジュエリーシスターズが久々にバトルするらしいぜ！」

「ここいらの走り屋で勝てるヤツはいないだろ、どつかの遠征チームじゃないのか？」
「久しぶりにあの天才的なドラテクが見られるなんて楽しみだなあ！」

果南「あーあ、噂が広まっちゃつてるなあ。本当はあんまり知られずにやりたかったんだけど。」

梨子「仕方ありませんよ。あのジュエリーシスターズのダイヤさんが動くんですから、ちよつとしたキツカケでも噂はあつという間に広がります。」

曜「そんなすごい人とバトルするんだね、千歌ちゃん。なんか不思議な気分だな。」

ルビィ「おねいちゃあ、もうすぐ来るよ！ 楽しみだね、ヘナールチャア！」

花丸「沼津最速パーサス、内浦のダークホース……しかも二人とも実力はほぼ互角……」

きつとすごいバトルになるすら。」

善子「で、なんで私も呼ばれてんのよ……」

花丸「普段学校に来ないから、こうでもしないと善子ちゃんと仲良くなる機会はない
ずらねえ〜」

善子「私には学校なんて必要ないのよ！あとヨハネ！」

ルビィ「善子ちゃあ！一緒に応援しよ！」

善子「うっ……分かったわよ……」

……バアアアアアアアア!!!

……ヴォオオオオオオ!!!

ルビィ「あつ！来たあ！」

果南「来たね。」

「センチユリーだ！いよいよ始まるぞ……！」

「相手はどこにいるんだ!?!」

千歌「ごめんね果南ちゃん！ちよつと遅くなっちゃった！」

ダイヤ「随分騒がしいですわね、どこかから話が漏れていたのでしょうかね。」

果南「そこはもうしようがないよ。バトルは賑やかな方が面白いし、このままやろうか。二人とも、車の調子は大丈夫？」

千歌「私のは大丈夫だよ！」

ダイヤ「…私も大丈夫ですわ。いつでも行けます。」

梨子「千歌ちゃん、頑張つてね！」

曜「事故だけはしないでね！」

千歌「分かった！私、頑張るよ！」

果南「よし、それじゃあスタート位置に車を並べようか。」

ブオオアアン!!!ブオオアアン!!!

フオオン!!フオオン!!フオオオン!!!!

「センチュリーの相手つて軽トラかよ…!!」

「ジュエリーシスターズも随分舐められたもんだな。」

「こんなのバトルする前から勝敗決まってるじゃんか！」

ルビィ「ほねいちゃあー!!!がんばえー!!!」

果南「カウント行くよー！」

「5!・4!」

ブオオアアアアアアアアアア
 ヴオオオオオオオオオオアアアア
 !!!!!!
 !!!!!!

「3!2!1!」

「GO!!」

バアアアアババババババ
 フオオオオオアアアア
 !!!!!!
 ギャギャギャギャ
 !!!!!!

「スタートは互角だぞ!あの軽トラどうなってるんだ!」

ルビィ「おねいちゃあのセンチユリー、様子が変わった: : どうしたのかな?」

花丸「マルもはつきりとは分からないけどきつと、それがダイヤさんの隠しダネずら...」

あのクリツパーにリベンジを果たすための: :」

善子「???」

バアアアアアアアアア!!!

ヴオオオオオオオオ!!!

ダイヤ「先頭はいただきますわよ。」

やはりこのクリツパー、只者では無いですわね。しかしこのバトルは2度目!同じ手

は2度も通用しませんわ!

千歌「すごい……!こんな大きい車をダイヤさんが運転してるんだ……!私も負けてられない!」

先頭は譲つちやつたけど、ここから抜き返すんだ!

プルルルル　プルルルル

果南「……来たんだね……今のダイヤはまた新しい輝きを見つけた。悪いけど、誰にも止められないよ。たとえ『鞠莉』であつてもね。」

鞠莉「No problem. 私が必ず止めてみせる。ダイヤはこんなところで燻つていていい存在じゃないもの。」

果南「そう。無駄だつてことはちゃんと伝えたからね。」

鞠莉「ええ。ありがとう、果南。」

ブオオオアアアアアアアア!!!　　ヴァアアアアアアア!!!!!!

ダイヤ。あなたは逃げ続けるだけよ。過去の挫折から逃げ出して、いつまでも向き合えないでいる。輝いてるあなたはとても眩しいのに、勿体ないわ。

「センチユリー先頭で突っ込んでくるぞー!!!」

バアアアアアアアアアア
 ヴアオオオオオオ!!!
 !!!!!

ギヤギヤギヤギヤギヤギヤギヤギヤギヤギヤ
 !!!!!

鞠莉「!!」

果南の言った通りね。今のあなたはとても輝いてるわ。”あの時”と同じように。でもあなたが本当に輝ける場所はここじゃない。こんなところにおいていい存在じゃないわ。

それを私が証明してみせる。

！
 アクセルを踏んでいける！コーナーでの立ち上がりのストレスが格段に減っている

ダイヤ「やはり！私の読み通りですわ！これなら勝てる！」

千歌「沼津一って言ってたもんなあ……やっぱりすごい速いや！俄然勝ちたくなるじゃん！」

バアアアアアアアアアア
 ヴアアアアアアアアアア
 !!!!!

私のセンチユリーは5リッターのV12エンジン、こんな場所で四輪ドリフトなど、間違ひなく自殺行為…

ですが！センチユリーには一つだけ突破口がありましたわ…それが、『左右独立バンク制御』！片側6気筒にトラブルが発生した場合でも走行できる機能ですが、私はそれを利用して意図的に片バンクを殺し、パワーを落としているのですわ！

これで実質2・5リッターの直6エンジン！

こうすることでアクセルワークがよりストレスなく行えるのですわ！

そして何より、アンダーパワーになったことで、コーナー出口での立ち上がりで躊躇なく踏んでいける！つまりは立ち上がり勝負で最大の不安要素を打ち消したのですわ！

今の私とセンチユリーは、無敵ですわ！

千歌「カーブで追い抜こうにも…来たっ!!」

ギヤアアアアアアアアアアアア

!!!!!!

道路いっぱい使つて車を滑らせでるから、追い抜く隙がない…！梨子ちゃんの時みたいに邪魔されると言うより、もはや壁…私の前を猛スピードで走る壁だ…！どうしよう、このままじゃ！

千歌「こうなったらー、次のカーブまでに差を詰めるーっ!!!」

フオオオオオオアアアア

ダイヤ「差を詰めて来た!!!?!?やはり並外れたパワーは健在ですわね!ですが!

千歌「やば!曲がれないッ!」

ギヤギヤギヤギヤーッ!!!

千歌「あつつ、ぶなああ:~:」

カーブの途中で追い抜きははやっぱり無理か:~:

ならこの先のS字で、この前の梨子ちゃん時みたいに一気に!~:。それもダメだ、ダイヤさんが先だとまたあの走り方で塞がれちゃう!

千歌「だったら!」

もうすぐ中低速セクシオンも終わる:~:。千歌さんに残された逆転のチャンスは、最後の高速コーナーのみ。ジュエリーシスターズの名前と、沼津最速の称号にかけて、絶対に前には出させませんわ

ボオオオオオオアアアア

ヴオオオオオオアアアア

!!!!!!!

第9話 怪物の正体

ダイヤ（高速セクションまであとコーナー2つ、そこを過ぎると緩い高速コーナーの連続……いくら向こうにパワーがあるとさえいって、それはこちらと同じこと！コーナーぶたつ凌ぎ切りさえすれば、あとはもう純粋なエンジンパワーのみがモノを言う世界！）

「千歌さん！この勝負、私がもらいましたわ！」

千歌（思い出した……これはバトルなんだ……普通に道を走ってるんじゃない。梨子ちゃんが私にしたみたいに、邪魔もしていいんだ！）

（ダイヤさんが私の追い越しを邪魔するんだったら……）

「私もそれを邪魔すればいいんだ！」

バオオオオオオオオ

ヴオオオオオオオオ

ダイヤ（距離を詰めてる……！またコーナーでオーバーテイクするつもりですわね

！）

「何度やっても答えは同じですわよ！」

ギヤアアアアアアアアアアアアアアアア
!!!!

千歌（違う… ここでは追い抜かない… ぶつからないギリギリのところまで止めておくんだ…！）

ダイヤ（今のでだいたいぶ距離を詰められましたわね… ですが追い抜かれてはいない… この先の右コーナー、そこさえ抑えてしまえば、私の勝ちは確実なものとなる！ 冷静に… 今まで通りの事をやるだけですわ！）クンツ

勝負は…

千歌「ここだあツ!!!」ググツ

ヴアアアアアアアアアア
!!!!

ダイヤ「なっ?!?!」
「しまった!!!」

さつきよりも一瞬早く、こちらがドリフトのために頭をインに向ける、その瞬間をついてアウトから並びかけてきた!

「くうっ!!!」

ギヤギヤツ

ボアアアアアアアア
!!!!

まさかアウトに張り付いてこちらのドリフトを封じるとは！ドリフトを見せてからこんな短時間で対応してくるなんて……車もバケモノですが乗り手も相当なものですわ……！

千歌「よしッ！決まった！」

私が横にいる限り、ダイヤさんはもう道を塞げない！これであとは思いつきりアクセスを踏んでいくだけ！追い越せば私の勝ちなんだ！

「行つけえええ!!!」

確かにドラテクと吸収力は光るものがありますわ。

……ですが！並びかけることはできてもオーバーテイクはできなかった！という事は、コーナリングスピード、コーナーからの脱出速度が上なのはインに付いているこの私！

あなたのタイヤには、これ以上スピードを上げてコーナリング中に私を追い越すだけの余裕はない！

更に！片バンク殺しているとは言え2500CC直6エンジン！パワーは伊達ではないのですわよ！つまり、このコーナーを抜ける時前にいるのは……！

バアアアアアアアア
!!!!!!

ヴオアアアアアアアア!!!

千歌「そんな……！どんどん引き離されていく！めいっぱい踏んでるのに！」

ダイヤ「……私の勝ちですわね。」

バアアアアアアア……

千歌「ダイヤさん、すごく強かったです！負けちゃいました〜！」

ダイヤ「ええ。伊達に沼津最速を名乗っている訳ではありませんからね。ですが千歌さん、私はあなたから教えていただいたこともあるんですよ？」

千歌「へ？そんなんですか？」

ダイヤ「時として、エンジンパワーを落として走った方が速いこともある、という事ですわ。あなたと走らなければ、私はこの先ずっとこのことに気付かなかったかも知れません。」

ダイヤ「それに私、以前千歌さんには一度負けてますのよ？」

千歌「ええ〜!?そんなんですか!?そんなこと全然記憶にないですよ！」

ダイヤ「フフツ、無理もないですわ。だから千歌さん、今回の私の勝利で丁度引き分けということですわ。今回のバトルを引き受けてくれて、本当にありがとうございます

た。バトル抜きにして、また一緒に走る機会があれば、その時はよろしくお願いしますね。」

千歌「… !!はい!!よろしくお願いします!ダイヤさん!」

ワイワイ

梨子「… こんなに集まるのね…」

曜「千歌ちゃんちの軽トラ見たいって言う人が、こんなにいるんだ…」

ルビィ「おねいちゃあと互角に戦える軽トラしゃん、見ておかなきゃね!ヘナウエルチャア!」

花丸「なんたつてあのセンチユリーと立ち上がりで並びかけるずらよ?そんなクルマの秘密ならぜひ見ておきたいずら!」

善子「我がリトルデーモンがどうしてもと言うから、仕方なく降臨したまで。光栄に思いなさい、リトルデーモンたち…!」

花丸「善子ちゃん、暇だったから着いてきたつて素直にいうずら。」

善子「人を暇人みたいに…!あんた達が連れ出したんでしょーが!ていうか善子

じゃなくてヨハネ！」

ダイヤ「この機を逃す訳にはいきませんわ！さあ、どんなからくりがあるんですの!？」

千歌「あつははは…」

果南「いや、ダイヤだけの予定だったのにまさか人づてに広まって、こんなに集まるなんてね…ちやつかり梨子ちゃんも来てるじゃん。」

梨子「いや、私は家が隣だから…」

曜「でも梨子ちゃん、すごい見たがつてたじゃん。気になるって言うて」
梨子「それは、まあその…」

花丸「エンジン！エンジンはどこずら!?!ここずらか!?!」

千歌「ああ、エンジンは荷台の方にあるんだ。」パカッ

ダイヤ「まさかのミッドシップですの!?!」

ルビィ「ふええ…独特なエンジンじゃん…ヘナウエルチャア分かる?」

花丸「…分からないはずら…」

善子「?????
」

花丸「千歌さん、このエンジンの型式とかわかりますか？」

千歌「うーん、えつと、ぜつとえつくすていーにーまるえー、だとか言つてたつけ…？」

ルビィ「ヘナウエルチャア、どう？聞いたことある？」

花丸「原動機の型式名があるからワンオフのオリジナルエンジンではないずら…でもこんなコンパクトなエンジンでこれだけハイパワーだったら、きつとみんな積むはずら…」

美渡姉「そりやそうだよ、それバイクのエンジンだから。」

ダイリこはなまルビィ「ええーっ!？」

美渡姉「足回りはカプチーノのを丸々移植、ミッションはシーケンシャル、んでエンジンはZXRT20Aっていう、元世界最速のバイクのエンジンで排気量が1200CC！ミッドシップで後輪駆動！これが高海家伝家の宝刀、スポーツカー殺しの軽トラだ！」

ダイヤ「スペックがめっちゃくちゃすぎますわ…というか誰ですの？」

千歌「うああ〜ごめんなさい！私の姉の美渡姉です！この車持ってきたのも美渡姉な

んだ！」

梨子「どんなコネを持ってたらこんな怪物軽トラ持つてくれるのよ…」

美渡「千歌はこれにもう5年は乗ってんだよ！ドラテクは志満姉直伝だし、高海姉妹総出で鍛え上げた内浦のダークホースってことよ！」

善子「車のことはよく分かんないけど、何を目指してるのか分からないくらいブツ飛んでるってことは何となく分かったわ…」

曜「千歌ちゃんちって旅館だよね??」

果南「何ならアタシも美渡姉志満姉に鍛えられたんだよ？」

ダイヤ「あなたも走ってたんですの!?!初耳ですわ…」

果南「言うタイミングなかったからね。エンジンブローしたつきりもう走ってないけどね。」

すごいなあ…

車っていうひとつの共通点だけで、こんなにも人が集まって、ひとつのことで盛り上げられる！こんな素敵なことってないよ！車の性能とか、バトルとか、車に乗ってるかどうかすらも関係なくここに集まってる…

この出会いをくれたのは、私が乗ってるあの軽トラなんだ！あの軽トラが、ここにい

る人たちと出会わせてくれた！

きつとこれからも、色々な人と出会って仲良くなれるんだろぅなあ…！

これからがすごく楽しみだなあ！

第10話 モコ、復活

プルルルル プルルルル

善子「おはようリトルデーモン、今日も朝から墮天日和よ……」

花丸「もしもし善子ちゃん？マルのクルマ直ったから、今夜ちよつと走りに行くずらか？」

善子「上級リトルデーモンには申し訳ないのだけれど、今夜は名も無きリトルデーモンたちと夜を共に過ごす約束があるの。だから行くことはできない……」

花丸「配信ずらね、それなら分かったずら、じゃあまた今度〜」

善子「ちよつ、何であんた配信のk」ピッ

花丸「善子ちゃん、今夜は忙しいみたいずら。」

ルビィ「うゆ、そうなんだあ……ちよつと残念だけど仕方ないね。じゃあ今日は二人だけで行こ！」

ルビイ「すっごい：：。ヘナウエルチャア、こんなエンジンどこで手に入れたの？」

花丸「エンジン本体はオークションで買ってきて、オーバーホールとチューニングをシヨップに任せただけ！」

ルビイ「そうなんだ！でも、それだけやっちゃうとお金いっぱいかかったんじゃ：：？」

花丸「心配ないです。お坊さんというのは煩惱とはかけ離れた存在だと思われがちですけど、実は煩惱にまみれてるといふのは昔からよくあることすら！いくら古いと言えど、潤沢な活動資金はすぐに手に入るのがお寺の強みすらね！」

ルビイ「お寺の人が一番言っちゃいけないことだよそれ：：。」

花丸「それに！マルはお金と引き換えに絶大なパワーを手に入れたすら！マルのモコには今、140馬力の心臓が入ってるすら！車体の軽さと圧倒的なパワー！内浦のダークホースである千歌さんを倒す日も近いすら：：！」

ルビイ「ヘナウエルチャア！女子高生がしっちゃいけない顔になっちゃってるよお！」

という訳で、新しく載せ替えたエンジンの調子を確かめるためにルビイちゃんと軽く流すことにしたけど、果たしてどれくらいフィーリングが違うのか：：。楽しみでもあり

おっかなびつくりでもあるずら。

ルビィ「ヘナウエルチャア、ルビィは準備バッチリだよ！いつでもどうぞ！」
ボボボボボ：

花丸「それじゃ、行くぞら!!」

ベエエエエエアアアア!!

ルビィ「!!前のエンジンよりも凄く速くなってる！すごいよヘナウエルチャア！」

花丸「・・・そうぞらね・・・ッ！」

ルビィ「??」

メカチューンというのはここまでパワーを引き出せるものぞらね・・・3000rpmまではトルクがスカスカで進まないけど、パワーバンドに入った途端、軽とは思えない加速を始めるぞら・・・ギア比も絶妙で、パワーバンドから外さずにシフトチェンジできる！素人のターボチューンなんか比じゃないバランスの良さでパワー!!

それ故に車体と足回りが付いてこれてないのが現状の課題ぞらね・・・これは、ボディ剛性と足回り部品一式マルつと見直しぞらね・・・

花丸「ルビィちゃん、今からちよつと攻め込んでみるから、しつかり掴まってるぞら。」
ルビィ「うゆ、分かったよヘナウエルチャア！」

花丸「行くぞら…！」

ヴェアアアア　　フアシューツ　　ンヴェアアアアアア!!!

ルビィ「ピギツ!! 乗り心地すごいことになってるよお!!」

花丸「しようがないぞら。エンジンパワーに対してまだ何もかも釣り合っていないから、攻め込んだ時に不安定になるのは当然ぞら。」

ルビィ「で、でもお!!」

花丸「今日はエンジンと車体のバランスを見るために来たんだから、ルビィちゃんにはもうちよつと我慢してもらおうぞらよ!」

ルビィ「ピ、ピギエエエエエ!!!」

ほねいちやあああああ!!!」

ヴェアアアアア!!!　　ギヤギヤギヤ!!!!

花丸「うん。車体のセッティングのイメージはだいたいできたぞら。付き合ってくれてありがとうね、ルビィちゃん!」

ルビィ「ハナウエルチャアの役に立てて…ルビィ、嬉しいよ…」ズルズル

花丸「じゃあ、あとはゆっくり上まで戻るぞら。もう全開走行しないから安心してね。」

ルビィ「ありがとうお……」

ベエエエエエエ……

ー2週間後ー

花丸「とりあえず、足回りとボディ剛性の見直しができたから、今からその試走をやるぞら！」

ルビィ「この前よりも走りやすくなってるといいね！ルビィも楽しみだよ！」

花丸「ルビィちゃん、ありがとう！じゃあ善子ちゃん、今回のナビシートよろしくぞら！」

善子「いきなりすぎるわね……っていうかヨハネなんだけど！なんか特別なこととした方がいいの？」

花丸「特に準備はいらないうら。試走の時は横に誰か乗ってくれた方が落ち着くつでけぞら！」

善子「そう……フフ、さすが私のリトルデーモン第1号、案外可愛いところもあるのね……」

花丸「じゃ、早速横乗りお願いするぞら！」

善子「よかろう！可愛いリトルデーモンの頼みとあれば！」

ヴェアアアアアアアアアア!!! ファシユーツ ヴェアアアアアアアア!!!!

ギヤギヤギヤギヤギヤギヤ!!!!

ガクガクガク!!!!

善子「何が『特に準備はいらない』よおお!!! 覚悟の準備が必要じゃないのooo!!!」

善子「全っぜん可愛くないわよooo!!! ちよ、リトルデーモン!!! ブレーキ!!! ずら丸!!! プレーキ踏んで!!! はなまるるるっ!!!」

花丸「ここでブレーキずら」

ギヤギヤギヤアアアアア!!!!

善子「ぶつかるううう!!! はなまるさああん!!!」

善子「うっつっ... ううっつ...」

ルビィ「よっつ善子ちゃん!! どうしたの!？」

花丸「全開走行が怖かったみたいすら。走り屋の走りを見てるから大丈夫だと思っただけ...」

善子「花丸ちゃん... ごわいよお...」

ルビイ「口調が変わっちゃうほど怖かったんだね……ルビイもこの前は怖かったから分かるよ……」

善子「じゃあなんで言ってくれないのよ！」

ルビイ「ピギイツ！ご、ごめんしやい……」

花丸「セツティングはバツチリだったから、もう帰ろつか？善子ちゃん、送っていくずらよ？」

善子「イヤ！イヤ！もう乗りたくない！」

花丸「もうあんなに飛ばさないから、ゆっくり帰るずら、ね？」

善子「そ、そうだルビイ！ルビイの車で送ってよ！」

花丸「ルビイちゃんの車はご近所さんの迷惑になるからダメずら。」

ルビイ「酷いよヘナウエルチャア……ルビイのアリストさんはちゃんと走るもん！」

花丸「フルストレートのアリストで沼津を走ったら警察呼ばれちゃうずらよ。善子ちゃん、もう帰ろ？」

善子「……分かった。でも絶対飛ばさないって約束してよね！」

花丸「分かった！約束するずら！」

ベエエエエエエ……

本当にゆっくり走るのね…

ずら丸って飛ばす時はあんなに危ないし荒っぽいけど、車はどこにもぶつけてないし、ゆっくり走るとすごく運転上手いし…

幼稚園以来だけど、まさか知り合いがこんな風になってるなんて思いもしなかったわ…

学校ではどんな感じなんだろう…ずっと学校に行っていないから何にもわかんないや…

ずら丸だけじゃない、学校でのルビイってどんな感じなのか知りたいな…

学校、行ってみようかな…

善子「あ、あのさずら丸…ちよつといい？」

花丸「ん？なんずら？」

善子「私さ、ちよつとやってみたいことがあるんだけど…」

花丸「うん、やってみたいことって？…?!」

善子「実はその…が…」

花丸「……」

善子「が…が…」

花丸「……」

第11話 謎のZ

花丸「…!?」

ヘッドライトの光!? マルが気付かないうちに、後ろに付かれてたずら… 車種は分からないけど、このシルエットはスポーツカーずらね。

丁度いいずら。マルのフルチューンモコで、引き剥がしてやるずら!

ヴェエアアアアアアア!!

これくらいのスPEEDなら善子ちゃんを怖がらせずに走れるずら。これで付いてこられないようなら、まだまだずらね。

ウオオオオオオオオ!!

そりや付いてくるか… そうでなくちや張り合いがないずらよ。

次はもう少し上げて、本気度60%で行くずらよ! さあ付いてくるずら!

ヴェエエエエエエエ!!!

ウオオオオオオオオ!!

素人ならもう付いてこれないスPEEDずら。これでもまだ付いてくるってことは、あの程度は腕に覚えがあるずらね…

ピカッ　　ピカピカッ

「!?」

パッシング!?

：　　マルとモコも随分と舐められたものずらね… そんなにマル達が邪魔なんだつたら、今すぐ退いてやるずら…

すぐに引き剥がして、お望み通り視界から消えてやるずら!!!

花丸「ごめん善子ちゃん、話は後ずら。アシストグリップしっかり握つとくずらよ。」

善子「へ？」

花丸「ゆつくり走るって約束、守れそうにないずら。ごめんね。」

善子「え?え?ちよつと待つてどういふこと!?まだ心の準備が…」

花丸「行くずら。」

ヴェアアアアアアアア

!!!!

ファシユーツ!!!

!!!!

ここから先は道幅も狭くてコーナーもきついセクション… 車のスペックとドラテク、両方揃つて高くないとここを最速で駆け抜けることは出来ないずらよ!

マルはこのスピードレコードを持つてゐずら。しかもその記録は載せ替え前のK6Aエンジンでの記録!フルチューンされて生まれ変わった、新生K6Aならもつと行

けるずら！

花丸「善子ちゃん、突っ込むずらよ！気合い入れるずら！」

善子「いやああああああああああああ!!!」

ヴェアアアアアアアアア!!!ギャギャアアアアアア!!!

行ける！今のモコならストレス無くコーナーをパスできる！これなら次のコーナーも振りっぱなしで突っ込める！

ヴェオオオオアアアアア!!!ギャアアアアア!!!

善子「ふっかゝる!!!ふっかゝる!!!」

行ける！次のS字もこのままのスピードで……！

ヴェアアアアアアア!!!ギャギャギャギャアアアアア!!!!

花丸「行けたずら!!これならスピードレコード更新も余裕ずら！」

バックミラーには……ヘッドライトの光はないずらね。

所詮、マルがここで全開走行すれば付いてこられる人はいないずらね……

花丸「ふう……」

マルがエンジンスワップをしてでもモコにこだわり続けることには、モコへの愛着以上に、意地もあるずら。

ただの軽自動車だとタカをくくって凶に乗るスポーツカーを片っ端から墮としていくことで、軽でもここまで戦える、軽の意地を見せつける、という意味もあるずら。

峠において最強なのはスポーツカーじゃなく、峠と無縁だと思われる軽自動車ずら！

見るすら！これが660CCという制限の中で生まれた、最強のマシンの実力ずら！！

ヴェアアアアアアアアアア！！

……ウオオオオオオオ……

何かおかしいずら……！きっちり引き剥がしてバックミラーからも消した……なのに拭いきれないこの違和感の正体は一体何ずら！

花丸「あ……？」

夜道なのにいつもより明るい……いや、ヘッドライトの照射範囲が広い……

花丸「まさか!!!」バツ

ウオオオオオオオオオオオオ!!!

花丸「よ、横に並んでたずらか〜!?」

いや違うぞら!この車は、バックミラーとサイドミラー、両方の死角になる位置に陣取ったまま、車間距離も大して変えずにずっと走ってたずら!

ドライバーはマルの死角になる位置も車間距離も、これがマルの全力の走りだという事も全部見抜いた上でこの位置をずっと走ってたずらか!?

そういう事ができるといことは、それだけドラテクやスピードレンジに余裕があるということ…さっきの走りはマルのほぼ100%の走りすら。あのペースならもうスピードレコードは更新してる…なのにあのドライバーは、その更に上を行くぞらか!?

花丸「か、勝てないぞら…」

チカツチカツチカツ

ウウウオオオオオオ…

テールランプの形を見るに、あれはフェアレディZ…

エメラルドブルーのZ…覚えておくぞら…

恐らくあれだけのドラテクなら、千歌さんかダイヤさん、もしくはそれ以上の腕ぞら。やつぱり、上には上がいるって事ぞらか?

花丸「善子ちゃん、善子ちゃん。おうち着いたずら！起きるずら！」

善子「う、うう：： あれ？私、何してたんだっけ：：」

花丸「オラとルビイちゃんと3人で峠に行つた帰りずらよ。しつかりするずら。」

善子「うーん：： あんまり覚えてないわ：： まあいいわ、送つてくれてありがとう。」

花丸「うん。また今度も一緒に遊ぶずら。」

べエエエエエエ：：

善子「なくんか嫌なことがあつたような、なかつたような：：」

「『これ』使うのは3年ぶりだなあ。直してからしばらく放置してたから心配だつたけど、調子よさそうだし大丈夫みたいだね。」

「腕と感覚も思ったより落ちてなくて、ひとまずは安心かな？『ブラインドアタック』も一応は成功したし、私もまだまだ負けないよ！なんてね。」

「鞠莉がダイヤに対して何か企んでる：：。それを止めるにしろ見届けるにしろ、その役は同じ過去に囚われてる私がやらなきゃいけない。千歌やその周りの子たちじゃダメなんだ。」

果南「だから頼んだよ。『サンパチ』。」

ルビィ「ええ!?!あそこでヘナウエルチャアより速い車がいたの?」

花丸「そうずら。オラも最初は振り切れるって思ってたんだけど、相手はそんなオラにずつと付いてきてたずら。しかも全開走行してる時に、ミラーの死角に入ったままずら。」

ルビィ「そんなあ……。ヘナウエルチャアってあの区間のスピードレコード持ってたんだよね?」

花丸「うん。しかも昨日のそれでスピードレコードは間違いなく更新してるずら。でもあのZは確実にそれより早く走れる実力を持つてたずら……。」

ルビィ「ルビィ、昨日は早く帰っちゃったから見られなかったのが悔しいよ。ルビィも見たかったなあ……。」

花丸「エメラルドブルーのフェアレディZだから、見ればすぐ分かるはずずら。もしかしたら峠にも来るかもしれないから、探すのもいいかもしれないずら。」

ルビィ「うゆ、そうだね!もしかしたらおねいちゃあも知ってるかも知れないから、聞いてみるよ!」

ダイヤ「エメラルドブルーのフェアレディZ、ですか…」

ルビィ「うん！ヘナウエルチャアがね、もしかしたらおねいちゃあと同じくらいの下ライバーなんじゃないかって！何か知らない？」

ダイヤ「うくん…聞いたこともないですわね…。沼津でそれほどの方であれば、私
が知らない訳がないですから。もしかすると外から遠征に来ていた方かも知れません
わね。それか、最近になって復帰した方の可能性もありますわね。」

ルビィ「そっかあ…。おねいちゃあでも知らない走り屋さんかあ…。一体どんな人な
んだろう？」

ダイヤ「レコード保持者の花丸さんよりも速く走れるということは、コースを熟知し
ていることと、テクニクも相当のものでしょう。恐らく、私たちとはかなり年の離れ
た方だと思いますわね。」

ダイヤ「何にせよ、そうやって峠で目撃されたということは少なくとも走る意思があ
るという事。探せば案外簡単に見つかるかもしれないわよ？折角ですし、週末にでも
探しに行ってみましょうか。」

ルビィ「ほんとにお!?やったあ!!ルビィ、会えるかもしれないと思ったら今からワクワク
するよ！おねいちゃあありがとお！」

第12話 過去のわだかまり

バオオオオオオオ
!!!!

ボタン

ルビィ「この前見たって言ってたのは別の峠だったけど、きつとここにも来てくれるよね！」

ダイヤ「ええ、そうですわね……。ですがルビィ、その前にひとつ聞きたいことがあるのですが。」

ルビィ「うゆ？どうしたの？」

ダイヤ「このマフラー、どうにかありませんの？」

ルビィ「えへへ！いいでしょこのマフラー！この方がアリストちゃんにも似合うと思っただあ！」

ダイヤ「……」

「ブツツツブロー、ですわわわわ
!!!!!!」

ルビィ「ピギィ！」

ダイヤ「ルビィ！いくらあなたでもこれは許容できませんわよ！黒澤家の娘ともあるうものが、あろうことかフルストレートなどという、野蠻ではしたくないカスタムなどして！あなたは走り屋である前に女子高生ですよ！もつと慎み深い立ち振る舞いをしなれば、網元である黒澤家のメンツ丸つぶれですわ！だいたいこのアリストも……」

鞠莉「その声は……ダイヤじゃない!!」

ダイヤ「!?」

「ま、鞠莉さん……」

ダイヤ「鞠莉さん、なぜ貴方がここにいます……?」

鞠莉「そんなことは今どうでもいいわよ！久しぶりね〜！留学に行った時以来だから、3年ぶりかしら！随分とLADYになったわね〜！」

ダイヤ「ええ……貴方もあの頃よりもずっと大人びていますわ……」

鞠莉「そうだ！お互い積もる話もあると思うし、どこかでお茶しながらでも話さない？もちろん私持ちで！」

ダイヤ「あ、あの……」

鞠莉「決まりね！どこかこの時間でも開いてる restaurant はあるかしら？
まあ開けてもらえばいいつか！それならく……」

ダイヤ「鞠莉さん！」

鞠莉ルビ「!?」

ダイヤ「お気持ちは嬉しいですが、今日はあいにくそういう気分ではないので……」

申し訳ありませんが、また次の機会にお願いますわ。」

ダイヤ「ルビィ、車を出してください。帰りますわよ。」

ルビィ「え、でも……」

ダイヤ「いいのです。だから早く。」

ルビィ「う、うゆ……」

バアアアアアアア……

鞠莉「…… first contact は失敗ね。」

果南「チャンスはまだあるから焦らなくてもいいよ、鞠莉。」

鞠莉「焦ってなんかいないわ……ただ嬉しかったのよ。ダイヤが元気そうだったの

と、久しぶりにダイヤと話せた事が。」

果南「でも、鞠莉がこれからやろうとしてることは、せっかく繋がりがけたダイヤとの関係を、また壊すことかもしれないんだよ？それでもいいの？」

鞠莉「ええ、分かっているわ。でもそれくらいの覚悟で向き合わないと、ダイヤは振り向いてはくれないわ。だからいいの。」

果南（鞠莉……だいぶ本気みたいだね……なら、私はもう鞠莉のことは止めない。二人を見守る役に徹するよ。）

バオオオオオオオオ……

ルビィ「おねいちゃあ……あの人って誰なの？おねいちゃあが話したくないなら、ルビィも聞かないけど……」

ダイヤ「そうですね、この際だから話しますわ。別に隠していたことではないですし、もしそうだったとしても、もう時効ですから。」

3年前、私と果南さん、そして先程の鞠莉さん。その三人で私たちは『スクールアイドル』という活動を行っていましたわ。

――3年前――

ダイヤ『今日の練習はここまでにしておきましょうか。イベントまでそういう日もありませんし、ここで体を壊したら元も子もありませんからね。』

鞠莉『じゃああとは各自自主練ってことでOK?』

果南『そうだね。基礎練習とかランニングなんかは家でできるから、そういうのがいいかもね。』

鞠莉『All right!じゃあ、私は先に帰るわね〜!』タタタツ

ダイヤ『鞠莉さん、最近は特に熱心ですわね。』

果南『リーダーのダイヤよりも熱意がすごいよ。まあ、あのダンスフォーメーションで一番重要な場所を任せてるからね。』

ダイヤ『そうですね。私たちも、鞠莉さんに負けてられませんわ。イベントまでの残り短い期間、気を引き締めていきましよう。』

果南『フフツ、そうだね。頑張らなくちゃ!』

ーイベント前最後の練習日ー

ダイヤ『鞠莉さん!その足の包帯、大丈夫ですの!?!』

鞠莉『自主練してたらちよつとぶつけちゃって…。お手伝いさんだったら大袈裟で、

ちよつとのキズなのにこんなに包帯巻いてくれちゃって〜!』

ダイヤ『んもー！少しの怪我でも、イベントに差支えがあったら元も子もないと言ったでしょう！貴方は大事なポジションなんですから、特に気をつけていたただかないと！』

鞠莉『oh！ダイヤったら、cuteなFaceが台無しだよ？』

ダイヤ『ま〜り〜さ〜ん〜!!!』

鞠莉『No！助けて果南！』

果南『鞠莉はおつちよこちよいだなあ。今回は大事なさそうでよかつたけど、気をつけなよ？』

鞠莉『off course!!』

ーイベント当日ー

ダイヤ『私たちの出番はもうすぐ。おふたりとも、気を引き締めて行きましょね。』

果南『さ、舞台袖に移動しようか。』

鞠莉『…そうね。行きましょ。…ううっ！』ガクツ

ダイヤ『鞠莉さん!?!』

鞠莉『大丈夫!!ちよつと足がもつれただけ!平気だから!』

果南『…』

『ちよつと触るよ、痛かったら言つてね。』

スツ ズキッ!!!

鞠莉『あう…っ!!』

果南『かなり腫れてる…この前ちよつとぶつけたつての、嘘でしょ?』

鞠莉『…』

果南『ダイヤ、ちよつと話があるからこつち来て。』

ダイヤ『…分かりましたわ。』

果南『今回のイベントは辞退しよう。』

ダイヤ『そうするしかありませんわ…。私の…私のせいですわ…』

果南『違う。ダイヤのせいじゃない。鞠莉にだって非はあるし、そもそも誰のせいでもないよ。しょうがなかったんだよ。』

ダイヤ『でも!あの時自主練をOKしたのは私で、あのフォーメーションを考えたのも私ですわ!あんなことさえ考えなければ…!』

果南『ダイヤ、自分を責めないで…またチャンスはあるから…。』

こうして、私たちはそのイベントを辞退した。そしてその後、再びスクールアイドルとして活動することはありませんでしたわ。

鞠莉さんには当時、海外留学の話がいくつか来ていました。ですが鞠莉さんはその全てを断って私たちとスクールアイドルを続けていました。

スクールアイドルとしての活動がなくなり、私と果南さんは鞠莉さんに海外留学する事を強く勧め、結果として鞠莉さんは留学した。鞠莉さんの未来を奪うまいと、私と果南さんが考えた、精一杯の策でした。

結局その後、在学中に鞠莉さんと会うことはなく、廃校阻止のために始めたスクールアイドルも辞め、学校は統廃合になった…

ダイヤ「これが果南さん、鞠莉さんとの事の顛末ですわ。」

ルビィ「…そうなんだ…」

ダイヤ「ルビィが気にすることなんてひとつもないですよ？これは私たち三人の問題。既に解決しましたし、これから進展することもないのですから。」

ルビィ「でもおねいちゃあ、だったら…」

「どうしてそんなに寂しそうな顔してるの？」

第13話 宣戦布告

千歌「ダイヤさんとルビイちゃんのお家つて、こんなに大きかったんですね〜！」
曜「さすが網元だけあるね〜。でも本当に良かったんですか？ 私たちがお邪魔しても。」

ダイヤ「構いませんわ。ここでお茶会をしようと言ったのは他ならぬ私ですから。遠慮なさらなくてもいいのですわ。」

梨子「ありがとうございます。そういえば、果南さんは来てないんですね。」

千歌「果南ちゃんも誘ったんだけどね〜、なんか大事な用があるみたいだったから断られちゃった。」

ルビイ「善子ちゃんどうしたの？なんか元気ないよ？」

花丸「ルビイちゃんの家の雰囲気は圧倒されて、いつもの設定も出せないくらいしおらしくなってるすら。」

善子「せ、設定言うなし…。」

ダイヤ「善子さん？そんなにかしこまらなくてもいいのですよ？今日は皆さんに楽しんでいただきたいので遠慮は不要ですわよ。」ニコツ

善子「は、はい……！」

（なに、この包容力は……！これが姉たる者の力というの……？ううっ！なぜだか懐かしい気分になる……！）

花丸「善子ちゃんがダイヤさんの気高さに触れて苦しんでるぞら。」

ダイヤ「みなさん、今回はここに集まっていたいただいて本当にありがとうございます。知り合えたのも何かの縁ですし、より親睦を深められればと思いますわ！」

梨子「善子ちゃん、ベントツ乗ってるんだろ！今度乗せてもらってもいい？」

善子「よかろう……しかしそれ相応の対価が必要……」

梨子「ええ……」

花丸「ダイヤさん、センチユリーはこれからどうしていく予定ですか？良ければ教えてください欲しいです。」

ダイヤ「今のセンチユリーでも良いですが、私としてはセンチユリーにこだわらず、他の選択肢を取るのもいいんじゃないかと思ってると思いますわね。具体的には……」

ピンポーン

ルビィ「うゆ、お客さんが来たみたい。ルビィが見てくるね。」

ダイヤ「いえ、ここは私が出ますわ。ルビィはいいですわよ。」

ルビィ「はい！」

ダイヤ「お待たせしました。どう言っただご要件でしょうか。」

鞠莉「チャオ☆この前ぶりね、ダイヤ！」

ダイヤ「うっ……ご、ご要件は？」

鞠莉「んもう、この前といvery coldじゃない？ Mary 悲しいわあ
！」

ダイヤ「ですから、ご要件は……」。ピキピキ

鞠莉「そうカタイこと言わずに！今からどこかでお茶しない？もちろん私持ちで！」

ダイヤ「ご要件がないようでしたので失礼させていただきますねー」ガラガラ

鞠莉「wait!!要件ね！要件なら話すから！」ガッ

ダイヤ「分かりました。ではご要件は。」

鞠莉「その前に、お家にあがらせてもらってもいいかしら？」

ダイヤ「お引き取りください。」ガッ

鞠莉「wait wait!! it's joke!!」

ダイヤ「だったら早く要件を話さないな!!」

千歌「ダイヤさん!泥棒ですか!」

梨子「泥棒にしてはなんか仲良さそうだけど…」

鞠莉「え、そお!?なら良かったわ!私、ダイヤのストーカーなの!」

一同「泥棒よりヤバい人だー!!」

ダイヤ「根も葉もないこと言わないでくださる!?!」

鞠莉「改めて自己紹介!私は小原鞠莉!ダイヤと同じ年よ!ついこの前までイタリアにいて、最近内浦に戻ってきたの!」

鞠莉「こう見えてもホテルオハラの総支配人の秘書であり…ダイヤのストーカーでもあるわ!」

ダイヤ「鞠莉さん!おやめなさい!シャレになりませんわ!」

曜「ホテルオハラ…って、淡島にあるあの高級ホテルの、ですか!」

鞠莉「That's Right!知ってもらえて嬉しい限りね!」

善子「でも、そんな内浦のVIPみたいな人がなんでわざわざ出向いてくるの?普通

だったら使い魔……じゃなかった、使用人に伝言とか任せればいいじゃない。」

鞠莉「ムツ！察しがいいわねそのオダンゴGirl！そう、私には目的があつてここに来たの！」

善子「善子だしヨハネなんだけど！」

一同（いやどっち……？）

鞠莉「ダイヤ!!」ゴソゴソ

ダイヤ「は、はい!!」

鞠莉「この果たし状を受け取りなさい!!!」バツ

鞠莉「ダイヤ、私はあなたに決闘を申し込むわ！詳しいことはその果し状に書いてあるから後で読んでいてね〜！」

鞠莉「では〜！」

一同「……」

花丸「嵐みたいな人だったずら……」

ダイヤ「言えてますわね……さて、この果し状に決闘の内容が書いてあると言っていました……」

ウオオオオオオ：

果南「随分長かったね。一悶着あった感じ？」

鞠莉「いいえ。お友達がたくさんいて、とつても楽しかったわ。」バタン

果南「そっか。にしても、やるんだったら今乗ってる車でも十分だと思っただけだね。」

鞠莉「大人気ないと言われても構わないわ。やるからには絶対に勝つ。生半可な覚悟じゃいけないの。」

果南「これだから金持ちは……」

ダイヤ「こ、これは……！」

ルビィ「おねいちゃあ、どうしたの!？」

ダイヤ「これは絶対に負けられないバトルですわ……。」

曜「バトルってことは、決闘の内容は車でのバトルなんですか?」

ダイヤ「ええ。しかも相手は格上……センチューでは到底敵わない相手ですわ。」

千歌梨子「相手は一体なんなんですか!？」

ダイヤ「それは……。」

果南「今乗ってるLC500でも十分だったのに、まさかLFAを持ち出してくるなんてね。」

これはダイヤにも勝ち目あるかどうか分かんないや。」

鞠莉さん、大人気ないですよ。。。反則級の切り札をいとも容易く出してくるなんて。

しかも私が負けた場合は、『車を降りる』ことを条件に出している。世界でもトップクラスのカーブランド、レクサスが送り出した和製スーパーカー、LFAを使っても私をこの世界から離れさせたいということですね。あなたのその熱意、昔と全く変わりませんわね。

ならば私もその熱意に応え、全身全霊で挑ませて頂きますわ。あなたの敗北時の『金輪際私と関わらない』という条件をかけて。

梨子「ダイヤさん、どうするんですか？」

花丸「いくらジュエリーシスターズの異名を持ってしても、こんなにスペック差のある相手じゃ勝負は。。。」

ダイヤ「分かっていますわ。ですが私はそれでもこの決闘、受けてたちますわ。」

ルビィ「おねいちゃあ！無謀すぎるよお！これに負けたらおねいちゃあは…！」
ダイヤ「大丈夫ですわ。受ける以上、丸腰では挑みません。私にも策はあるのですよ
？」

千歌「それって、どんな策なんですか!？」

ダイヤ「そうですわね…まずは手始めに、
「センチユリーを廃車にしますわ。」

一同「ええーーーーっ!？」

第14話　ダイヤの秘策

―果たし状をもらってから2週間後―

松月にて

曜「ダイヤさん、本当にセンチユリーを廃車にしちゃったね…。これからどうするんだろ?」

花丸「これでダイヤさんの車はなくなっただずら…。バトルは2週間後、こんなタイミングで車を手放すなんて、理解できないずら…。」

ルビィ「そんな…。おねいちゃあ、センチユリーのことすごく気に入ってたのに…。一体どうしちやっただらう?」

梨子「でもダイヤさんは、センチユリーを廃車にすることが対抗策の第一段階だつて言ってたよね?」

善子「もしや、『センチユリーはかりそめの姿…。ヴェールを脱いだ真のセンチユリー

は、誰にも止められない……』ってこと!?!さすがダイヤさん!墮天使とは何たるかを分かっている!」

梨子「よつちゃん、今はそういうノリじゃないのよ……」

一同「……」

千歌「……私たちが不安になっても仕方ないよ。それに、あのダイヤさんだよ?私の軽トラとバトルする時だってちゃんと対抗策を考えて来るんだから、スーパーカー相手に何も考えずに挑むなんてこと、絶対ないよ!」

「だから信じよう?ダイヤさんを!」

ダイヤ「完成まではあとどれくらいかかりそうですの?」

メカニック「そうですね、大体10日くらいを目処に考えていただきましたね。」

ダイヤ「そうですね……できればあと一週間で完了させていただきたいですわ。車のフイリングを少しでも体に覚え込ませたいので。」

メカニック「分かりました。できるだけ急ピッチでやってみます。しかし黒澤さん、今回は間違はなく今までで一番ピーキーな乗り味になると思いますよ。いくらあなただとは言え、今回ばかりは保証できませんからね。」

ダイヤ「ええ、重々承知しております。そのうえで誓約書にサインをしたのですから、

遠慮なく作業を進めてください。」

メカニック「分かりました。どうかお気を付けて。」

ルビイ（車庫の隅に置かれたセンチユリー… おねいちゃあ、あんなにお気に入らなかったのに、どうしてあんなに簡単に廃車にするって言ったんだろう…）

すごいや、いつもおねいちゃあがお手入れしてたから、ピツカピカだよ…もう、おねいちゃあがこの車と走ることはないと思うと、なぜか寂しくなる…

「あれ…?」

ボンネットが閉まりきってない… エンジンでも眺めてたのかな? 乗り換えるって決めても、ずっと一緒に走ってた車だもん、きつと名残惜しいよね…

「ルビイも眺めとこ…」

おねいちゃあがいつも自慢していたIGZ—FE、これで見納めになっちゃうけど、忘れないよ… ガパツ

「!!」

どういうこと!? センチュリーの車体から…

エンジンだけがきれいになくなって… !

千歌「鞠莉さんとダイヤさんのバトルって、確か高速道路だったよね？」

梨子「そうね。新東名高速道路の駿河湾沼津サービスエリアから、浜松サービスエリアまでの区間ね。」

花丸「LFAの力を遺憾無く発揮できる場所はそこくらいしかないすら。でもいくら深夜とはいえ、一般の車もいるから常に危険と隣り合わせすら。」

善子「私たちはどうやって観戦するの？」

曜「いつもみたい途中で観戦はできないから、スタートとゴールのサービスエリアで二手に分かれて待つとくしかないかも。」

千歌「そうだよね。着いていくって言っても、そんなにパワーのある車って私たち持っていないもんね。」

花丸「あるすらよ。1台だけ。」

一同「……」ジーツ

善子「え、私!？」

花丸「持ち主のせいであんまりパツとしなかつたけど、善子ちゃんの乗ってるSL55は最大で500馬力出るすら。あの二人に追いつけるスペックの車は現状で善子ちゃんだけすら。」

善子「我が眷属にそんな力が秘められていたとは……さすがは墮天使ヨハネ、眷属も超一流ね！まさにデステイニー！」

曜「じゃあ誰かが横に乗ってビデオ通話しながらだったらバトルの様子も見られそうかも！」

千歌「あ！それいいね！じゃあそうしよつか！」

ヴオボボボボボボボ……

この車が『完成』してから5日……扱い方がやつと分かり始めてきましたわね……ですがあのメカニックが言った通り、ピーキーすぎる……じゃじゃ馬ですわ。

ですがこれくらいでないと鞠莉さんには勝てない。

貴方が全力で来るのなら、私も今の全力をもって迎え撃つ……

それが、「かつて友人だった方」への私なりの礼儀ですわ。

ーバトル当日ー

駿河湾沼津サービスエリア

鞠莉「チャオ！みんなギャラリーとして集まってくれたのね！Maryも嬉しいわ

！」

千歌「果南ちゃん！果南ちゃんは鞠莉さんを応援するの？」

果南「いや、応援っていうよりは見守り役って感じかな。このバトルは私たち三人の話だからさ。それに、鞠莉1人だけだったら可哀想だしね。」

鞠莉「んもう、果南ったら優しいのね！」

「ところで、私の決闘相手はどこかしら？」

曜「それが… まだ来てないみたいなんです。」

鞠莉「まさか、土壇場になって逃げ出した、なんてことないでしょうね？」

ルビィ「お、おねいちゃあは絶対来ます！ただちよつと遅くなってるだけで…」

鞠莉「It's joke！ちよつとからかっただけよ。ダイヤがそんな人じゃないのはずっと昔から知ってるから。」

ヴオオオオオオオオオオオオ：

果南「お、来たみたいだね。」

花丸「!!あの車は…！」

ヴオボボボボ：

ダイヤ「皆さん、お待たせして申し訳ありませんわ。」バタン

鞠莉「wow: ! 驚いたわ。まさかセンチユリーじゃないとはね。」

善子「すごい: : 真つ赤なスポーツカーに変わっちやつてる: : ずら丸、あれなんて車なの?」

花丸「あれは: : トヨタ スープラすら。トヨタきつての名車中の名車すら: : でも、本当にあれに乗り換えただけで勝てる見込みがあるとは思えないすら: :」

ルビィ「そうか: : そうだったんだ: : ルビィ分かった: : !」

梨子「ルビィちゃん、何が分かったの?」

ルビィ「お姉ちゃんがしたこと: : どうやって鞠莉さんに勝とうとしてるのか: :」

ルビィ「お姉ちゃんは、千歌さんや花丸ちゃんと同じことをセンチユリーでやったんだよ!」

曜「同じこと: : ? : : : : もしかして!」

花丸「そんな: : ! 確かにそうすれば互角以上に戦えるけど: : でも非現実的すら! 第一上手くいったとして扱えるかどうか: : !」

ルビィ「お姉ちゃんは本気なんだ: : それくらいお姉ちゃんは鞠莉さんに勝ちたいんだ!」

千歌「どういふこと? 私たちとやってる事が同じって: :」

梨子「つまりあのスープラには、センチュリーのエンジンが丸ごと載せられてること。あの車はスープラであってスープラでない…。それだけじゃなく、多分スペックを上げるためにかなりチューニングしてあると思う。文字通りモンスターマシンよ。」
ダイヤ「まずはお礼を。私の得意分野で勝負しようと言ってくださり、本当にありがとうございます。」

鞠莉「そんな事は気にしなくていいのよ。あなたの目を覚まさせるために、あなたの得意分野で勝負して、勝つ。それが挑戦者としての私なりの礼儀よ。」

ダイヤ「私の土俵で勝負を挑まれた以上、負けるつもりはありませんわ。」
鞠莉「お互いに土気は十分みたいね。」

ダイヤ「さあ、そろそろ始めましょうか。」

そして終わらせましょう。過去のわだかまりに決着をつけるのです。

鞠莉「ええ、そうね。」

あなたには戻ってきてもらおう。その世界を捨てて、あの時のように私たちの元へと。

だから。

だから。

負けられないっ
!!!

第15話 激突!ダイヤ対鞠莉

ヴオオオオオオオオオオオ
フアアオオオオオオオオ
!!!!!!

ダイヤ（できることは全てやった…多分それは鞠莉さんも同じこと。後は私と鞠莉さん、どちらの意志が強いかで勝負が決まりますわ。）

鞠莉（あと2km、そこから先はダイヤと私、ふたりだけのフィールド…いえ、ステージと言っても過言ではないかしらね。あの時立つことができなかつた、眩く輝くステージ…）

バアアアアアアア!!!

梨子「みんな、聞こえてる？スタート地点まであと2km切ったわ。いよいよ始まるわよ、ダイヤさんと鞠莉さんの全開バトルが。」

千歌『私がバトルするわけじゃないのに、すごくドキドキしてきた〜!』

曜『私もだよ！高速道路のバトルなんて、今まで見たことないよ！』

花丸『車のスペックはどちらも未知数すら！これはどつちが勝つてもおかしくないずらよ！きつと沼津の走り屋に語り継がれる一戦になるずら！』

ルビイ（おねいちゃあ…どうか無事に帰ってきてね…）

梨子「私も楽しみだわ。生きているうちにそう見られる対決じゃないもの、この目で見届けるわ！」

善子「で！なんで私の車をリリーが運転してるのよ！」

梨子「よっちゃんの腕じゃあのスピードにはついていけないでしょ？この前乗せてもらった時も、何度もぶつけそうになってたじゃない。危なっかしいから今回は私が運転するわ。」

善子「ぐぬぬ…」

曜『ほおぅ？』『リリー』と『よっちゃん』ねえ…』

千歌『二人ともいつの間にかそんなに仲良くなったのかなあ？』

梨子「ちがつ！よっちゃんとは別にそんなんじゃない…！」

善子「ちよつとりりー！何動揺してんのよ！ハンドルちゃんと持っててよ！」

花丸『学校には来ないのにちやつかり仲良くなってるずらね、よっちゃん。』

ルビイ『ルビイ、梨子さんよりも先に善子ちゃんと仲良くなったのに…』

善子「あんた達までなによ!これは...その...属性の波長がシンクロしただけよ!」

梨子『みんな、もうすぐ始まるわよ!よつちゃんも準備して!』

千歌「始まるって!みんな集まって!果南ちゃんも一緒に、って、あれ?果南ちゃんどこ行つたの?」

鞠莉「行くわよ!!!」

ダイヤ「望むところですよ!!!」

ヴオオオオオオオオオオオオ!!!

フアアアアアアアアアアア!!!

梨子「私達も!!」

ヴアアアアアアアアアアア!!!

善子「む、向こうの方が圧倒的に速い!500馬力あるんじゃない!?」

梨子「トラコンがかかって全然進まない!そんな!トラコン切つときなさいよ!」

善子「知らないわよそんな事!とにかく追いかけるしかないじゃない!」

曜(痴話喧嘩しか聞こえないよ...)

ダイヤ（周りの車が止まって見える…！慣らして走り込んでいましたが、このスピードレンジがまさかここまで恐ろしいとは…！）

ダイヤ（恐ろしいのはスピードだけじゃない、この加速力！迂闊にセンチユリーの時のように踏めば、凄まじいGと共にシートに体が押し付けられる…！これはもはや車ではなく戦闘機ですわ！）

鞠莉（ダイヤの車も中々のパワーね…。やつぱりLCじゃなくLFAを選んでいて正解だったわ。だけど、残念ながらあなたはLFAには絶対に勝てない。スピードレンジもパワーも、全て最初から考えられて作られたこの車が、有り合わせの車体とエンジンを組みあわせただけのカスタムカーに負けるわけがない！）

鞠莉（ダイヤ、あなたはこの決闘を引き受けた時点で、負けが決まっているのよ…）

鞠莉（だからこそ疑問に思う…。賢いあなたがそれを分らないはずがない。それなのにこの決闘を引き受けたのは何故…？）

鞠莉「考えても仕方ないわ。早速お手並み拝見と行きましょう。さあダイヤ、その車でどこまで着いてくれるかしら！」

フアアアアアアアアアアア
キアアアアアアアアアアア
!!!!!!

鞠莉「アクセルを踏んでるのに……離れない……!」

今のアクセルは7割……あと3割踏み込めば恐らくは引き離せる……だけど……だ
けど!

でも離さなきゃ勝つことはできない……どうするの、鞠莉!

ここからは我慢比べですわよ……根負けした方が後ろに下がる!さあどうするん
です!鞠莉さん!

鞠莉「……これ以上は……!」

フアアアアアアアアアアア
!!!!!!

善子「ダイヤさんが前に出た!ダイヤさんが勝ってるわよ!」
千歌「そのまま引き離せるかな!?!頑張つて……ダイヤさん!」

私を前に出しましたわね……。鞠莉さん、もうあなたに勝ち目はありませんわよ！あなたにはこのままゴールまで、スープラのテールランプだけしか見せませんわ！

鞠莉「ダイヤにしてやられたわ!!」

どこかで取り返すチャンスを見つけなきや……。！ダイヤの意表も突けて、なおかつ前に出られるチャンス……

……
ヴアアアアアアアアアアアアアア
!!!!!!

出るのが少し遅かったかもしれないな……。ふたりに追いつけるか分かんないけど、やるだけやってみるか。結果はどうあれ、私たちの過去に決着が付くバトルになるんだから。私にはあのバトルを見届ける義務がある。だから意地でも間に合わせるよ。

第16話 大切なもの

鞠莉「何とかして前に出ないと……！なにかチャンスは！」

ダイヤ「このまま前を死守しますわ！鞠莉さん、あなたの負けです！」

梨子「このままダイヤさんの勝ち逃げて勝負が決まるの……？」

花丸「いや、バトルは最後まで何が起こるか分からないぞ。ほんの少しのきつかけで大どんでん返しが起こるぞら。」

ゴアアアアアアアアアアア!!!!

キャアアアアアアアアアア!!!!

ダイヤ（あれは車のブレーキランプ……3車線とも塞いで走って、鬱陶しいですわね。）

（……はハイビームで気づいてもらいましょう。）

フアアアアアオオオオオ…
パツ

鞠莉（あれは…！ダイヤは気づいてない、仕掛けるならここしかない！）

鞠莉「今よっ!!!」

バツ

キュアアアアアアアアアアアアアン

ダイヤ「んなツ…何を…！」!!!

しまった!!あれは!!

善子「ああっ!!ダイヤさんが！」

一同「抜き返された!!!」

やられましたわ…!!車線を塞ぐ車に気を取られて、完全に見落としていた…

道の左端に、ギリギリ車1台通れる分の路肩があることに…!

もし気付いていてもノーマークだった…鞠莉さんならきつと、砂利の多い路肩を走るなんてリスキーなことしないとタカを括っていたから!

梨子「マズイわね…。ダイヤさんが劣勢に立たされつつあるわ。」

千歌「まだ分かんないよ！これくらい差なら、ダイヤさんはきつと取り返すよ！」

花丸「いや、実際はもつと厳しいぞ。鞠莉さんのあのオーバーテイクは、ダイヤさんのメンタルに大きいダメージを与えてるぞ。ダイヤさんの意表を突いてアクションを起こしたこと。それによってオーバーテイクを成功させ、ダイヤさんの心の余裕を奪ったこと。そして鞠莉さん自身は、多少の無茶で突破口を開いたことによる自信と、優位に立てたことで心に余裕を生みだしたぞ。」

梨子「この状況で心に余裕ができると、今までかかっていた心のリミッターが解除される…。そうなったら」

曜「ダイヤさんはダメージから立ち直るのに時間がかかって、鞠莉さんはその分もつと差を広げられる…。」

ルビィ「おねいちゃあ！負けないで！！ルビィも行くから!!!」

千歌「ルビィちゃん、今から行っても追いつけないよ。今はここで信じよう？ダイヤさんが勝つのを」

ルビィ「う、うう…。！」

なんて速さですの…。!?先程までとは全く違う走り、まるで別人ですわ！ジワジワと

ああ：： 1GZが叫んでいるのが分かりますわ：：

私のセンチユリーが、1GZが死んでいくのが、手に取るように分かる：：

それでも。私はあなたの命を削ってでも、鞠莉さんに勝たなければなりません。

私は、あの日からあなたと走り続けてきた日々を、否定されたくはないのです。

だから、もう少し私のわがままに付き合っていたいただきたいのです。

鞠莉「ダイヤが、追い上げてくる!!」

さっきのオーバーテイク後から調子が崩れていたように見えたけど、持ち直しつつあるって事ね：：。ゴールももうすぐそこ、どんな小細工も駆け引きも通用しない。ここから先は、純粋な思いの強さと車のスペックのみの世界!

鞠莉「さあ勝負よ!ダイヤ!!あなたの意地を見せて!!」

キヤアアアアアアアアアアアアアアアア

フアアアアアアアアアアアアアアアアアア

ダイヤ「行っつけええええええ!!!!」

梨子「2台とも速すぎて追いつけない!けど、ダイヤさんが鞠莉さんに並びかけてる

!」

ルビィ「行けえーっ!!おねいちゃああーっ!!!」

鞠莉（ああ…今、すごく楽しい!!肩書きも地位も全部忘れて、またこうしてダイヤと肩を並べて、しのぎを削ることができてる!!あの時みたい… A q o u r sとして果南とダイヤと3人で、同じ場所を目指してた時みたいに…!）

私の独りよがりだってことは分かっている。ダイヤをこの世界から引き離したとしても、あの日々はもう戻ってこないことも、ダイヤがああの時の輝きを取り戻すことがないことも。

でも私は…私はただやり直したかった。あの時私のせいで、追いかけることを諦めなければいけなかったダイヤに、謝りたかった。そしてもう一度、ダイヤや果南と同じ時間を過ごしたかった。

でも、そんな願いも叶わない。ダイヤの車は私のLFAに並びかけて、私はもうじき追い抜かれる。でも悔いはないわ。こうして最後に、眩いあなたの輝きをもう一度見られたのだから…。

ダイヤ「行ける…!」

私の1GZが、スープラが僅かにパワーで上回っている！あと一息で、あと一息で前に出られる!!

そうすれば私は鞠莉さんに勝って、この世界を諦めずにいられる!!

なのに……何故、涙が出るのでしょうか……？

本当は嬉しかった。海外に渡って以来音信不通だった鞠莉さんと3年ぶりに会えて、涙が出るほど嬉しかった。でも喜ぶことは許されなかった。否、許せなかった。私のせいで未来を失いかけた鞠莉さんに、私が再び歩み寄ることは許されなかった。例えば鞠莉さんが許したとしても、私が私を許すことができなかった。でも、せめてバトルの中だけでも一緒にいたかった。だから勝ち目のないバトルだと分かっている、形は違っている、もう一度だけ同じ目標を目指して共に走りたいかった。

でもまた私は、勝ちたいという自分の思いを優先して、繋がりがけた糸を断ち切ろうとしている。

勝ち負けなんか本当はどうでもいい。もし許されるなら、私はあの時と同じように3人で一緒にいたい。大切な誰かを失いたくない!

鞠莉「ダイヤの加速が… 止まった…？」

ダイヤ「もう二度と会えないなんて… 嫌です!!!」

このまま並走してゴールできれば… このバトルは引き分け!あと10kmも持ちこたえれば、それで全て終わりますわ!

ガゴツ!!!

フワツ…

ダイヤ「あつ…!?」

道路の隆起で、車体が…!

今のタイヤでは車体を立て直せるだけのグリップ力はもう残っていない…

ギヤギヤギヤギヤギヤギヤ
!!!!

鞠莉「ダイヤ!!!」

一同「ダイヤさん!!!」

ルビィ「おねえちゃん!!!」

私は、自分の願いすら叶えられないまま…

ヴァアアアアアアアアアアアアアアアアアンンン
梨子「あれは!？」

ギャギャギャギャ　ガシャン!!!

善子「あのスポーツカー、ダイヤさんの車に体当たりして止めようと・・・！」

果南「鞠莉!!」

鞠莉「果南っ!!!」

キヤアアアアア!!　ガシャンツ!!

ギヤアアアアアアア・・・

曜「何が起こったのか、全然分かんなかった・・・！」

梨子「コントロールを失ったダイヤさんの車のスピンを、車二台で両側から挟んで止めたのよ・・・説明してても信じられないわ・・・」

シューウウウウウ・・・

ヴオオオオオオオ：

梨子「よっちゃん！停止表示板と発煙筒出して！」

善子「わ、分かった!!」

鞠莉「ダイヤ!!」バタン!!

最終話　これから

「浜松サービスエリアにて」

ダイヤ「……一体何が起こったのです……？」

私のスープラは道路の隆起を踏んで、制御不能に陥ったはず。なのに、気付けば車2台に挟まれる形で停止していました。1台は鞠莉さんのLF Aなのは分かりましたが、もう1台は一体誰のもの？

鞠莉果南「ダイヤ！」

ダイヤ「鞠莉さん……と、果南さん!？」

鞠莉「急にスリップするからもうダメだと思ったわよ！」

果南「バトルには間に合わなかったけど、こっちは間一髪間に合ってたよ。」

鞠莉、上手く合わせてくれてありがとね。」

鞠莉「No problem!ダイヤのためならお安い御用よ！」

ダイヤ「という事は、このフェアレディは果南さん、あなたのものですか？」

果南「そうだよ。だいぶ前にエンジンブローしたのを直したつきり眠らせてたのを、引っ張り出してきたんだ。」

ダイヤ「そうでしたの…。でもお二人とも、私のせいで車を傷だらけにしてしまつて、申し訳ありません…。このお詫びは必ずいたしますので！」

果南「いいよそんなの。私も鞠莉も、ダイヤを助けられたんだから気にしないよ。」

ダイヤ「で、ですが！」

鞠莉「ダイヤがどーしてもつて言うんなら、考えちやおつかなく？」

果南「ちよつと鞠莉！」

ダイヤ「いいですわ果南さん。私はどんな事でも構いません。」

鞠莉「んゝつと、そうね…。そうだ！」

鞠莉「果南と3人でお茶しない？ダイヤったら久しぶりに会えたのにずっと冷たいんだもん！バトルもDrawで終わっちゃったんだし、いいでしょ？」

ダイヤ「それは…。私には鞠莉さんと一緒にいる資格なんて…。友人である資格なんて…。！」

鞠莉「果南から聞いたわよ。ダイヤ、あの時自分のせいで私が怪我したと思ってるん

でしょ？」

鞠莉「バカねえ。あれは無茶した私が悪いんだからダイヤが責任を感じる必要なんてないのよ？それに、私のせいでダイヤと果南にラブライブを諦めさせてしまったことを謝りたかったの。」

鞠莉「一体何年、3人一緒にいたと思ってるの？そんな些細なことで崩れるほど私たちの関係はダテじゃないでしょ？」

鞠莉「だから、友達じゃないなんてそんな悲しいこと、言わないで。」

ダイヤ「…鞠莉さん…！」

千歌「車の、チームですか？」

ダイヤ「ええ。こうしてこれだけの人が集まったのも、きつと何かの縁ですし、これを機に思い切ってチームを結成するのも悪くないかと思いました。」

梨子「いいんですか？チーム結成ということは、やっぱりそれなりに実力のある人じゃないと、バトルやスピードレコードの面で、あんまりよくないんじゃないかと思ってしまうんですが…。」

ダイヤ「その点は気にしなくても大丈夫ですわ。私が結成しようと思った目的はあくまで私達の交流のため。スピードを競ったり、他のチームとバトル、なんてことはありませんから心配しなくても良いですわ。」

曜「それじゃあ、私みたいに車を持ってなくてもいいんですか？」

ダイヤ「ええ、それも構いませんわ。必ずしも車で集まる事ありませんわ。私はこの9人で集まる事ができればいいのです。」

千歌「スピードを競ったりバトルしたりもしなければ、車に乗ってなくてもいいって、ダイヤさんって不思議なこと考えるね。」

曜「ね。私なんか千歌ちゃんや梨子ちゃんにさせてもらって峠に行ってるだけでなんにも知らないのに、それでもいいって言うてくれるんだもん。」

梨子「でも、そういうダイヤさんの考え方って何だか分かる気がするんだよね。今はまだ言葉にしづらいけど..」

ルビィ「お姉ちゃん、いきなりチームを作るって言い出したからビックリしたけど、特に決まりがないことの方がビックリだよ。」

花丸「そうずらね。ダイヤさんのことだからってつきり、車のバトル漫画みたいに自分

は一線を退いて、少数精鋭の遠征チームでも作るのかと思つてたずら。」

善子「そうなの？ 私としては、入る時やチームにいる時に変な隔たりを感じなくていいと思うんだけど。」

花丸「それもそうずらね……マルもそつちの方が居心地はいいかも。」

ルビィ「返事は来週で大丈夫つて言つてたけど、みんなどうするのかなあ……」

鞠莉『本当にあんな条件でよかつたの？ 今までのダイヤなら、更に強いチームを作ろうとか思つたはずじゃない。』

ダイヤ「今でもそういう野心のようなものはありますわ。ですが今本当に必要なものはそのような目標ではなく、気兼ねなくいられる雰囲気だと思ひますの。」

果南『気兼ねなくいられる雰囲気、ねえ。』

ダイヤ「ええ。速さを追ひ求めると言つても、追ひ求める手段やその舞台は人によつて様々。もつと言へば、車で走る理由、目的ですらも人それぞれですわ。私を含め、目的も手段もバラバラな9人がこうして集まつた意味は、そのような「速さ」や「強さ」を追ひ求めるところにはないと思ひますの。」

鞠莉『つまり、ただ一緒にいるだけでいい、それこそに意味があるつてこと？』

果南『ま、3年も離れ離れになつた経験を持つてる人が言うんだから、説得力はある

と思うけど？」

ダイヤ「茶化さないでくださいまし！… まあ入る入らないは個人の自由ですし、強制はしません、他の方々も事の本質は理解していると思っております。」

―数日後―

ヴオオオオオオオオオ：

千歌「ううう、なんか落ち着かなくてやっぱり来ちやったよ… 誰かいるかな？」

梨子「誰にも連絡はしてないし、平日の夜だから知り合いは来ないんじゃない？」

曜「週末だったら集まってたかもね… ってあれ？」

ベエエエエエエエ：

花丸「あれ！千歌さんたちずら！どうしたんですか？」

千歌「花丸ちゃんと善子ちゃんじゃん！2人こそどうしたの？」

善子「ヨハネよ！リトルデーモンがどうしても走りたいって言うから、夜会を中断して付き合ってるのよ。」

曜「善子ちゃん、すごい友達思いだね！」

善子「だからヨハネだってば!…うわ、治安悪そうな車来た!..
ドウンドウンドウンドウン!..」

果南「あれ、千歌たち揃ってんじゃん。おい、どうしたの?」

鞠莉「チャオ! こんな偶然ってあるのね!」

千歌「うわ、果南ちゃんに鞠莉さんまで! 2人ともこんな時間にどうしたの?」

果南「いや、暇だったからさ、ドンキ行こうと思って鞠莉誘ったら、鞠莉がここ行こうって。」

鞠莉「夜中のドン・キホーテも exciting だけど、こっちの方が楽しいわね!」
梨子「社長令嬢がそんな治安の悪い車に乗っちゃいけないですよ! 誰に見られてるか分からないですよ!」

鞠莉「WOW! 梨子ってば優しいのね!」

果南「別に普通だと思うけどなあ。..お、これで全員揃ったんじゃない?」
バアアアアアア!!!

花丸「相変わらずの爆音ずらね!..」

ルビィ「着いたよお姉ちゃん!..って、みんな! 何で集まってるの?」

千歌「いや、なんか偶然が重なってね!」

ダイヤ「こんなことってあるんですね!..。せっかくだし、この前の答えを今こ

「で聞いてもよろしいですか？」

曜「いいですよ！もうみんな答えは決まってるだろうし！」

梨子「そうだね。」

花丸「もういつでも大丈夫ずら！」

善子「我が心の内に秘めたる思いは既に決まっていた…。」

ルビィ「みんな決まってたの？って、ルビィもなんだけど」

果南「私も話を聞いた時から答えは決まってたよ。」

鞠莉「むしろそれ以外に選択肢はないデース！」

千歌「みんな、思いはひとつだったんだね！」

千歌「作ろう！みんなでひとつのチームを！みんなの居場所と、これからの未来を！」

第2部 第1話 函館から来たふたり

ウオオオオオオオオオ!!!

フヴァアオオオオオオ!!!

花丸「だいぶ慣れてきたみたいじゃないね。最初よりかは良くなってるぞら。」

善子「墮天使ヨハネの手にかかれれば、これくらい造作もないことよ! ああ! 我が才能が怖い...!」

花丸「上手いとは言っていないぞらよ。及第点にはまだまだ届いてないぞら。」

善子「ぐえっ... なによ! ちよつとくらい褒めたつていいでしょ!」

花丸「ほらほら、今は運転に集中するぞら。」

千歌「善子ちゃん、頑張ってるね!」

梨子「花丸ちゃんもルビィちゃんも走ってるのに、自分だけ走れないのはちよつと悔しかったんでしょね。」

千歌「そっかあ。運転もいい線いってるし、すぐに上手くなりそうだね！」

梨子「運転センスはあるんだけど、いかせん車が扱いにくいせいで伸び悩んでるわ。初心者にあれだけのハイスペック車は無理があるわね。」

千歌「うーん：．．． 思ったより道は険しそうか。」

花丸「今のコーナー、ブレーキングはもう少し遅らせても大丈夫すらよ。」

善子「我が第六感が告げていた！今のはあれくらいで良いと！」

花丸「そんなこと言ってるのと速くなれないすら：．．． って言っても、善子ちゃんのペー
スで頑張るのが一番ずらね。自信がついてきたらもう少し遅らせてみるといいすら。」

善子「善子じゃなくてヨハネ！って、急に優しくなるのね。なんか怖いわ：．．．」

花丸「何言ってるずら、マルはいつも優しいすらよ？」

善子「そういうこと自分で言わないのよ！」

千歌「でも、なんだかんだ楽しそうで良かった。」

梨子「そうね。今までは一人で配信して、画面越しのリアクションを貰うだけだったから、きつとどこかで寂しいと思ってたんでしょね。」

千歌「配信？なんのこと？」

梨子「いや!!特に意味は無いのよ?よっちゃんが寂しそうって言うのが言いたかっただけだから!」

千歌「ふくん、そっかあ。」

梨子(あつつぶなかつたあ〜〜!)

ブオオオオオオオオ

千歌「わ!梨子ちゃんあれ見て!函館ナンバーだよ!」

梨子「ほんとだ!こんなところまでわざわざ車だなんて、観光かしら?」

「今日は少ないですね。この地域のドライバーに聞いた限りでは、ここが最も有名だという話ですが。」

「…」

聖良「今夜は軽く流して、また明日見に来ましようか、理亜。」

理亜「…うん。」

ブオオオオオオオオ!!!……

千歌「こんな時間にここに来るなんて、あの車の持ち主も走り屋なのかなあ？」

梨子「車がWRX STiだということと今の走りから見れば、恐らくは走り屋でしょうね。ただ、わざわざ函館からこんなところに来る理由がわからない。ここまで来なくても、関東エリアには有名な峠も沢山あるのに……」

千歌「まあ理由なんて人それぞれだし、たまたまここが近かったっただけかもしれないよ！バトルの相手って訳でもないんだし、あんまり気にする事ないと思うよ？」

梨子「そうね。私の考えすぎだわ。ありがとう千歌ちゃん……。よつちゃんたち戻ってきたわね。」

ウオオオオオオオ……

花丸「千歌さん梨子さん！さつきものすごく速いWRXとすれ違ったぞら！ね、善子ちゃん！」

善子「善子じゃなくてヨハネよ！運転に集中してたし、速かったからよく分かんなかったわよ。このヨハネの邪眼を持つてしても捉えられないとは……不覚！」

千歌「白い車でしょ？さつきここで見かけたよ。函館ナンバーだったよ！」

花丸「北海道ぞらか!?そんな遠くから来ててなおかつあんな速さだなんて……恐ろしいぞら！」

梨子（花丸ちゃんがこれだけ驚くほどの速さ……並大抵の走り屋ではなさそう。それ

にさつきのあの様子：。一応気にかけておいた方が良さそうね。）

千歌「明日学校だし、今日はもうこれくらいにして帰ろっか。みんな気を付けてね！」
よしまる「はーい！」

ー翌朝、学校にてー

梨子「千歌ちゃん。申し訳ないんだけど、今夜もちよつと走らない？」

千歌「いいよー！でもどうしたの？梨子ちゃん平日はあんまり走らないのに。」

梨子「ちよつと気になることがあつてね。今夜はチームの人をできるだけ集めておきたいと思ってるの。」

千歌「じゃあダイヤさんたちにも声掛けといた方がいいね！」

ー昼休みー

千歌「あ！ルビイちゃん！」

ルビイ「千歌さん！どうしたんですかー？」タタタツ

千歌「今日の夜つて集まれそう？梨子ちゃんが集まつてほしいんだつて！」

ルビイ「次の日がきつそうですけど、がんばルビイすれば大丈夫です！」バツ

千歌「さすがルビイちゃん！頼もしいね！花丸ちゃんと善子ちゃんにも聞いてもらつ

ていい？できるだけ多い方がいいんだって！」

ルビィ「分かりました！」

千歌「曜ちゃん！今夜って予定空いてる？」

曜「空いてるよー！もしかしてみんなが集まるの？」

千歌「話が早いねー！そうだよ！できれば曜ちゃんにも来て欲しいなって！」

曜「ヨーソロー！千歌ちゃんの頼みとあれば、たとえ火の中水の中！どこでも行くで
あります！」

千歌「やったー！じゃあ夜に迎えに行くね！」

曜「フツフツフ、その必要はありません！善子ちゃんが近所に住んでるから、善
子ちゃんと一緒に行くよ！」

千歌「え！善子ちゃんの家って近かったんだ！じゃあ善子ちゃんと一緒にいつものと
ころでね！」

曜「ヨーソロー!!」

ー夜ー

ワイワイ

梨子「鞠莉さん、ダイヤさん以外のメンバーは揃ったわね…。」

果南「千歌からいきなり連絡来たから、何かかと思つたよー。」

善子「リトルデーモンたちとの集いがあったというのに……」

花丸「梨子さんからお誘いだなんて、珍しいぞら。」

梨子「みんなに集まってもらつたのは、見ておいてほしい走り屋がいるからなの。」

千歌「え？それって昨日の白い車のこと？」

梨子「ええそうよ。あの車、只者じゃないわ。」

花丸「でも北海道から来てるんですよね？今夜もまた現れるとは思えないぞら。」

梨子「いいえ。あの車は必ずここへ現れるわ。」

昨日のあの様子……あれは明らかに「獲物」を探していた。私たちはバトル目的のチームでは無いけれど、あの車のバトルの様子は必ず私たちの糧になるものがある。そう確信している。

ブオオオオオオオオ……

一同「来た!!」

ルビィ「梨子さんすごい！白い車、本当に来た！」

バタン　バタン

曜「女の子2人組だ！私たちと同じくらいだね。」

聖良「昨日よりは多いですね。これは期待できそうですね、理亜」
理亜「うん。」

聖良「あそこの集団に聞いて情報を集めましょうか。」
スタスタ：・

善子「げ！こつち来てるわよ！ここは墮天使の聖なる力で気配を消すしか：・ギラン！」

聖良「すみません、私たち北海道から来てるんですけど、こつてバトルとかも行われてるんですか？」

善子「あ、あ、あと、えと、わ、私あんまりよく分かんないんで、そつちの人たちに聞いてもらってもいいでしゅか？」

聖良「分かりました。ありがとうございます。」

善子「は、はひい：・」

曜「ああ！善子ちゃんがやられた！」

ルビイ「まさか話ただけでやられちゃうなんて：・！」

花丸「彼女はチームの中でも最弱：・想定内ずら」

聖良「すみません。この峠ってバトルは行われてないんですか？」

梨子「やってますよ。私達も一応、この峠をホームコースにしてるチームです。」

聖良「そうなんですネ！それなら話が早いです。実は、バトルを申し込みたいと思っ
ているのですが。」

一同「!!」

理亜「:.」

聖良「下りの一本勝負でお願いしたいのですが、よろしいでしょうか？」

梨子「バトルを専門にしている訳ではないので、ご期待に添えるかは分かりませんが、私
たちで良ければ受けますよ。」

理亜「:.」

聖良「そうですか！ありがとうございます！では:.」

理亜「姉様。こんなチーム、相手しなくていいよ。」

一同「!？」

聖良「理亜！」

理亜「あれ、アンタたちの車でしょ？見なよ。型落ちのヴオクシーに田舎ヤンキー仕
様のアリスト、軽のモコに拳句の果ては軽トラ。いくら初対面だからってそんな車で相
手しようだなんてよく言える。私たちは遊びで言ってるんじゃない。」

聖良「理亜！言葉を慎みなさい。相手に失礼ですよ！」

理亜「事実を言ったまでだよ、姉様。」

善子「こんの：：!!」

花丸「善子ちゃんが復活したぞら!」

曜「押さえるよ!」ガシッ

梨子「お連れの方はああ言ってますが、どうしますか?」

聖良「妹が不躰なことを申し訳ありません。バトルはあなたがたにお願いしたいです。」

梨子「分かりました。こちらもご期待に添えるようにしますので、よろしくお願いします。」

聖良「ありがとうございます。では以後の情報交換用に、連絡先を：：」

梨子「はい。お互い有意義なバトルにしましょう。」

聖良「ええ。必ず。」

第2部 第2話 走る理由

ダイヤ「ムツツキー……!!!」

曜「ダイヤさん落ち着いて！」

ダイヤ「落ち着いてなどいられるものですか！なんですのその無礼千万な輩は！」

ダイヤ「挨拶もろくにしないで、言うに事欠いて挑発など、ふざけているにも程がありますわよ！」

善子「さつすがダイヤさん!!ダイヤさんならそう言ってくれと思ってたわ！」

ダイヤ「それほどでもありますわよ！なんとと言ってもこの私は沼津一の走り屋、ジュエリースターズの黒澤ダイヤですわよ！」

善子「ダイヤさん！あんなじゃりん子たちなんかコテンパンにしちやつて！なんとたつて沼津一なんだもの！」

ダイヤ「フフフ……言われなくたって、」

善子「おおおー!!!」

ダイヤ「できませんわ。」

善子「なんでよ!!!」

梨子「それはそうでしょ。ダイヤさんのスープラはこの前のバトルで壊れちゃったから修理中なんだから。」

善子「うわあくん！そうだったく！」

ダイヤ「面目ないですわ…」

果南「しようがないよ。この前のアレは不可抗力だし、仮に事故つてなくてもあんな挑戦者が現れるなんて誰も予想できないし。」

鞠莉「一番の問題は、誰がbattleするかつてことよね。ダイヤ以外にも実力のある人はいるんだもの。」

花丸「バトルの条件は向こうが全部指定してるんですよね？」

梨子「ええ。期日は3日後、場所は『西伊豆スカイライン』。」

花丸「地元民のマルたちの方が土地勘と経験値では有利すら。有利と言っても、よっぽどの用事がない限りはあの道は走らないから、アドバンテージと言えるかは微妙かどうか…」

ダイヤ「そう考えると…候補は千歌さん、花丸さん、果南さんの3人でしょうか？御三方とも実力はありますし、勝機は十二分にあるかと。」

果南「あー、私はパス。その日は家の用事があるから走れないや。」

ルビィ「そうになると、あとは花丸ちゃんと千歌さんの2人になるね。」

花丸「マルは何度か走ってるからある程度慣れてはいるけど、実力と車のスペックは千歌さんのが断然上だし：。」

千歌「でも私、手伝いでいつも使ってるのは下の道だから、西伊豆はあんまり走ったことないんだよね。」

一同「うーん：。」

曜「じゃあ、実際にコースを走って、どっちが速いかで決めたらいいんじゃない？」
ダイヤ「いいですね。花丸さんと千歌さん、2人でバトルして勝った方がバトルを受けるということにしましょう。」

ー翌日、西伊豆スカイラインー

ヴオオオオオオオ：

花丸「まさかこんな形で千歌さんと走る日が来るとは：。」

千歌「花丸ちゃん、よろしくね！手加減なしで行くよ？」

花丸「はい！オラも手加減なしの全力で走らせてもらおうぞら！」

梨子「ダイヤさんはこの勝負、どちらが勝つと思いますか？」

ダイヤ「花丸さんはコースレイアウト、相手の走り方やマシンスペックなどの情報を

知識として理解して走る方です。一方、千歌さんはそのような情報を感覚で掴んで走る方です。前もって分かっている情報が多ければ多いほど花丸さんが有利ですが、だからといって千歌さんの分が悪いわけではありませんわ。あらゆる情報を感覚で掴み、即座に対処する適応能力の高さ……あれは土地勘や知識などと言った情報を凌駕する可能性も秘めていますわ。」

梨子「つまり、どちらが勝つてもおかしくない……バトルの選考とはいえ、ますます気になる一戦ですね。」

ルビィ「あれ？善子ちゃんと曜さんは？」

果南「ああ。善子ちゃんはその2台の追走つて感じて参加するみたいだよ。最近走る練習してるし、あの二人に引つ張ってもらえば感覚も掴みやすいだろうしね。」

鞠莉「曜は単に近くで見物したいってだけらしいわ。好奇心旺盛ね〜！」

善子「頑張つてついて行くとは思うけど、期待はしないでよね？」

曜「ヨーシコー！安全運転でお願いしますであります！」

善子「善子って言うな！ヨハネ！」

曜「ほらほら、もう始まつちゃうよ！」

善子「え!? ウソ!」

ルビィ「カウントいきまーす! 5! 4! 3! 2! 1!」

フオオンフオオンフオオン!!

ヴァアアンヴァアアン!!

ルビィ「ゴー!!!」

ギヤギヤギヤギヤ!!!

フアアアアアン!!!

ヴェアアアアアアアアア!!!

曜「全速前進! ヨーシコー!」

善子「ヨハネだつてば!」

ウヴァアアアアアアア!!!

千歌「まずは花丸ちゃんの後ろについて様子見しようかな。」

この道は初めて走るけど、そんなにキツイカーブもないし、道の状態もそこまで悪くない。道幅も割と広いし、走りやすい道だ。これなら今から前に出ても走れそう。

花丸「流石に付いてくるずらね。そうじゃなくちゃ、ダイヤさんを圧倒した相手とは

「言えないぞら。」

いくらマルの後ろを付いてきているとは言え、普通初めて走る道をこんなスピードで走らないぞら。ドラテクもそうだけど、千歌さんは並外れたハートの強さも持つてるぞらね。

フオアアアアアアアアアアアア
ヴェアアアアアアアアアアアアアアアア
!!!!!!

曜「うわ、あつという間に2人とも見えなくなっちゃったよ！」

善子「この墮天使ヨハネを振り切るとは、人間風情がなかなかやってくれるわね……」

曜「善子ちゃんはまだ始めたばかりでしょ。無理せず走ろ？」

善子「承知！……にしても、あまり土地勘のない千歌さんでさえあんなスピードで走れるのに、北海道から来たって言うあの二人はなんでこの場所を対決場所に選んだのかしら？」

曜「うーん……何事においても経験っていうのは大きなアドバンテージになるからね。それ無しで勝算があるとすれば、よっぽどテクニクに自信があるとか？あ、ここもうちよいアクセル踏めるよ。」

善子「あ、うん……あの妹はともかく、姉の方はそんな自信家には見えなかったけど。」

何か企んでるといふか、考えがありそうな顔をしてたわね。」

ヴェアアアアアアアアアア!!!

花丸「依然として千歌さんに動きはないすらね。」

千歌「道の様子はだいたい掴めてきた……そろそろ前が出るよ!」

フアアアアアアアア

千歌さんが加速した!!!ここで仕掛けるつもりすらね!

花丸「させないっ!」

ヴェアアアアアアアアア!!!

千歌「!?」

花丸ちゃんの車、速い!!

軽自動車なのにパワーが全然違う!エンジンを載せ替え?したって言うってたけど、こんなにも変わるものなんだ……!

花丸「いけるすら!」

怪物軽トラを相手に、マルのモコがサイド・バイ・サイドをキープしてる!やっぱり、スズキが世に送り出したK6Aエンジンは最高で最強のエンジンすら!だからこそ……だからこそこの勝負、負けられない!

花丸「マルの車と、テクニツクが！一番速いということを証明してみせる!!」

千歌「花丸ちゃん、すごい気迫…車からでもすごく伝わってくる！」

花丸ちゃんは、私よりも運転は上手くないって自分で言ってた。そして車のことも。でも花丸ちゃんは、私がつてないものをたくさん持つてる。車の性能や部品に関する知識、道の走り方や運転の基本的な技術。そして何より、自分が乗る車に対しての自信と誇り。

花丸ちゃんのその熱意は、私なんかよりもずっと大きいし、もしかするとチームの中で一番大きいかもしれない。それつてすごく素敵なことだし、羨ましい。

私は…

なんで走つてるんだっけ？

花丸「うう… やっぱり適わなかったぞら…」

ルビイ「花丸ちゃんは頑張つたよ！それ以上に千歌さんが速かつただけだよ！」

梨子「次のバトルは千歌ちゃんが出るつてことで決まりね。」

ダイヤ「違う場所から来ているとはいえ、挑戦者はこちら側。相手がどんな策を講じ

てくるか分かりませんわ。気を引き締めて臨むのですよ。」

千歌「はい……。でも、明日のバトルは花丸ちゃんに出てもらった方がいいかもしれないです。」

一同「え!？」

鞠莉「what, s!?!いきなり何を言い出すの千歌っち!」

千歌「このバトルでは勝ったけど、やっぱり少しでも走り慣れてる人の方がいいと思うし、勝ったって言っても最後の最後までずっと並走してたから……」

梨子「それでも勝ったことに変わりはないのよ?自信を持って、千歌ちゃん。」

花丸「マルは、千歌さんに走ってもらいたくないのよ?自信を持って、千歌ちゃん。それでも同じチームだから、自信を持って送り出したいはず!」

ルビィ「そうですねよ!千歌さんなら絶対にあの二人に勝てますよ!」

千歌「花丸ちゃん……。みんな……」

「……。分かった。私頑張るよ。」

曜「……」

善子「千歌さん、だいぶこの道にも慣れてきたんじゃない？ タイムも上がってきてるし。これなら明日は問題なく勝てそうね。」

曜「そうかな？ 私はなんか引つかかるんだよね。」

善子「そうなの？ とてもそんな感じには見えないけど。」

曜「なんか元氣ないって言うか、上の空って言うか……ここもうちよいイン寄せられるよ。」

善子「オッケー。」

ギヤアアアアアアアア!!!

善子「元氣の塊みたいな千歌さんにそんなことあるの？」

曜「どんなイメージなのそれ……見てれば分かるよ。千歌ちゃんとはずっと一緒にいるし」

善子「おお……！ 魂の契約！ 友人という関係を超越した、まさに闇の眷属！」

曜「闇って！ 悪者みたいになってるじゃん！ そんなんじゃないよ！ 次キツめの右カーブだよ。」

善子「承知!! ↑インフェルノ・コーナリングッ↑!!!」

ギヤギヤギヤギヤ!!!

曜「うわあああ!! やりすぎだよ！」

バタン

千歌「はあ……」

全然ダメだ……いつもみたいに走れなくなってる……バトルは明日なのに、こんなじやみんなに合わせる顔がないよ……

曜「千歌ちゃん。」

千歌「曜ちゃん……」

曜「千歌ちゃん、無理してない？」

千歌「っ……！だ、大丈夫だよ！コースもだいぶ頭に入ってきたし、明日は調子よく走れそうだよ！」

曜「そっか。でも千歌ちゃん、無理は絶対にしちやダメだよ？私ができることだったら何でもするからね？」

千歌「うん……ありがとう、曜ちゃん！頑張るよ！」

翌日、待ち合わせ場所にて――

梨子「いよいよね。千歌ちゃん、準備はいい？」

千歌「うん。大丈夫だよ。」

曜（千歌ちゃん、やっぱり元気がいい……みんなは気づいてないみたいだけど）

花丸「千歌さんなら絶対勝てるぞら！自信を持って走って！」

ルビィ「千歌さん、がんばルビィ！」

ダイヤ「気持ちを強く持つのですよ！北海道に負けてはなりませんわよ！」

千歌「うん！精一杯やってみるよ！」

ブオオオオオオオオオオ……

善子「来たわね。」

ルビィ「あ、来たよ！」

善子「それにしても、曜の言う通り千歌さんが本調子じゃないって言うなら、このバ

トル勝てるの？」

曜「私の予想ではないけど、このままだと千歌ちゃんは……負ける。」

善子「!!」

聖良「お待たせして申し訳ありません。」

梨子「いえ。約束の時間まではまだありますから。バトルの詳細をもう一度確認して

おきましようか。」

聖良「そうですね。バトルのコースは西伊豆スカイライン、同時スタートで先にゴールに着いた方の勝ちということだ。」

梨子「スタートはこの広場で、ゴールは戸田峠駐車場でしたよね。」

聖良「ええ。ところで、対戦相手はどなたでしょうか。」

ダイヤ「高海千歌さん。この方があなた方の対戦相手ですわ。」

千歌「…高海千歌です。よろしくお願いします。」

聖良「鹿角聖良です。いいバトルにしましょう。」

理亜「鹿角理亜。よろしく。」

梨子「ではそろそろ始めましょうか。車をスタート位置に並べてください。」

千歌「いつまでもウジウジしてられない！みんなのために勝たなきゃいけないんだから！」

勝たなきゃ… 勝たなきゃ!!

ルビイ『各ポイント準備OKです！対向車もいません！』

梨子「わかったわ、ありがとう。それじゃアカウントいきまーす！」

「5！4！3！2！1！」

千歌（大丈夫、このコースはきついカーブが少なかった。私ならブレーキをかけずにギアを落とすだけで突っ込んでいくこともできる！）

フアアアアアアツ　　フアアアアアアア
！！！！

理亜「！」

聖良「車の性能もさることながら、ドライバーのテクニクも相当なものです。それでこそ私たち、『セイントスノー』の相手に相応しいというものです。」

善子「第一セクション、千歌さんが先頭で通過したわ！」

（曜が心配してたの、やっぱり思い過ぎだったみたいね。あのキレのある走りなら大丈夫そう！）

フアアアアアアア
ヴオアアアアアアア
！！！！！！

千歌（ほぼ全開で走ってもなかなか離れない…。やっぱり向こうから条件を言うてくるくらいだもん、相当自信あるはずだね。）

千歌「でも…。絶対に勝ってみせる！」

ダイヤ「これはマズいですわね……このバトル、いよいよ分からなくなってきましたわ。」

ダイヤ『こちら第2セクション戸田駐車場。辺り一帯に霧が立ち込めてきましたわ。』
 梨子「霧が……！分かりました。一般車の情報はまだ入っていないのでバトルは続行しますが、事故などのトラブルに注意してください。他のオフィシャルの方にはこちらから伝えておきます。」ピッ

霧……バトルに限らず、運転において夜の闇よりもドライバーにとって脅威になる存在……千歌ちゃん、気を付けて……

フッ

千歌「なにこれ……霧!?うう、急に視界が悪くなった!」

アクセルを踏みたくても、視界が悪いせいで踏んでいけない!でもそれはきつと相手も同じはず!条件は全部同じだよ、焦るな私!

聖良「霧ですか……。どうやら気候は私たちの肩を持つようですね。準備はいいですか、理亜。」

理亜「オツケー。いつでもいいよお姉様。」

聖良「任せましたよ。ツ!!」

ヴオアアアアアアアアア

千歌「な、なにっ!? 追い上げてくる!？」

ギアアアアアアアアア

ヴァアアアアアアアア

カーブ手前で追い抜かれた! 霧のせいで視界が悪いはずなのに、私よりも上のスピー

ドでカーブを抜けていった…! どういうこと!？」

千歌「ツ!! 追いかけなきゃ!」

ファアアアアアアアア

テールライトの光がうつすら見える。霧が晴れるまではあの光を追いかけていけば、

引き離されるなんてことはないはず! そこから、追い越してみせる!

理亜「次キツめの左。ブレーキ使つて。」

ヴァアアアアアアオオオオ!!! キアアアアアアアア!!!

理亜「3速で踏めるだけ踏んで。」

ヴオアアアアアツ

ヴオアアアアアアアアアアアアアアアア!!!!!!

理亜「緩めの右。そのまま突っ込める。」「
 ヴアアアアアアアアアアアアアアアア
 !!!!」

キヤキヤキヤキヤ
 !!!!

恐らく相手は『土地勘のある方が有利』だと考えたことでしょう。従来であれば全くもってその通りです。ですが私たちは違う。私たちの前では土地勘などという曖昧なものは意味をなささない。私たちなら悪天候ですらも味方に付けられる。

さあ千歌さん、あなたがどうやって私たちに挑んでくるのか、見せてもらいますよ。

第2部 第4話 ともだち

フアアアアアアアア!!!

どうして? どうしてあんなスピードで走れるの? こんなに見通しのきかない霧に覆われてて、土地勘もないはずなのに!

ダメだ、勝たなきゃ! 勝たないとみんなに合わせる顔がない!

ヴァアアアアアアア!!!

スピードが一気に落ちましたね... 土地勘はあまりないということでしょうか。だからと言って手を抜くことはしませんよ。

理亜「次短いストレート。ギアそのまま全開で。」

千歌「どうすれば...」

テールライトがほとんど見えなくなっていく...! どうすればいい? どうすればあ

の二人に勝てるの？

ダイヤ「千歌さんが追い抜かれて、しかも差が開いてますわ！一体何が起こっているの!？」

梨子「そんな……！千歌ちゃん、練習は十分していたはず！」

どうしちやつたの、千歌ちゃん……！

花丸「もしかして、マシントラブルずら!？」

善子（違う……千歌さん、やっぱり大丈夫じゃなかったんだ！やっぱり曜の言う通り、負けてしまう……）

理亜「姉様、あの軽トラ遂に見えなくなっちゃったよ。やっぱり大したことなかったね。」

聖良「……あのキレのある走りは見間違いだっただけでしょうか……」

フアアアアアアア……

テールライトを追いかけながら走ってるけど、それももう限界……あの二人との差が
どんどん開いてる。やっぱり私じゃダメだったんだ……

―翌日―

キーンコーンカーンコーン

花丸「やつとお昼休みずら〜」

ルビィ「それにしても昨夜のバトル、まさかあんなことになるなんてね。」

花丸「千歌さんがバトルを放棄してバトルは取り消し、再戦が週末の夜ずら。どうして千歌さんは途中でやめたんだろう？」

ルビィ「うーん：．．ご飯食べ終わったら、千歌さんの様子見に行く？」

花丸「そうしてみるずら。」

梨子「千歌ちゃん、一緒にご飯食べよ？」

千歌「うん。」

曜「あ、私も一緒にいい？」

梨子「もちろん！千歌ちゃんもいいよね？」

千歌「うん、いいよ。」

千歌「… 昨日はごめんね。みんなあんなに応援してくれたのに、あんなことしちゃって。」

梨子「誰も怒ってないから大丈夫よ。それよりも、千歌ちゃんらしくない行動だったからみんな心配してるわ。あの時何があったの？」

千歌「… ほんのささいな事だよ。だからあんまり気にしないで。」

曜「千歌ちゃん…」

千歌「それよりさ！ 次のバトルって誰が出るの？ あの二人、すつごく強かったからなにか作戦も考えないと！」

梨子「そ、そうね… バトルに出る人はまだ決まってないわ。できれば花丸ちゃんか果南さんに出て欲しいなどは思っているけれど…」

千歌「そっかー、花丸ちゃんもすごく速いから、きつと勝てるよ！ 果南ちゃんは… 走つてるところ見た事ないからなあ、どうなんだろ？」

曜「千歌ちゃんはそのでいいの？」

千歌「… え？」

曜「千歌ちゃんはそのでいいの？ 悔しくないの？」

千歌「そ、それは…」

千歌「… 理由はどうあれ、あの二人には適わなかったんだから、私じゃダメだった

んだよ！でもあんな速い人たち見たことなかったから、すごく勉強になったな〜って
！」

梨子「千歌ちゃん：。」

千歌「あ、そうだ！私先生に呼ばれてたんだった〜！ちよつと職員室に行つてくるね
〜！」タタタタ：。」

梨子「やつぱり話してくれないわね、千歌ちゃん。」

曜「多分、みんなに心配かけたくないのかもしれないかもしれない。」

梨子「どうしたものかしら：。」

ルビィ「こんにちは〜」

花丸「こんにちははずら〜、つてあれ、千歌さんはどこずら？」

曜「花丸ちゃんとルビィちゃん！どうしたの？」

ルビィ「千歌さんが心配だったのでちよつと見にきました。」

花丸「でもないですぬ〜。」

梨子「ふたりとも：。ありがとう！」

ルビィ「それで、様子はどんな感じですか？」

曜「あんまり良くないね。なにかあったのは確実なんだけど、千歌ちゃん話そうとし

ないし……」

一同「うーん……」

花丸「こうなったら、最終手段に出るしかないぞらね……」

ルビイ「そうだね、それが一番効果があると思う！」

梨子「私たちに残された道は一つだけね。」

曜「そうだね……（何の事だろ……？）」

ジュー……

曜「……え？私!？」

夜、三津浜にて

ザザー……

千歌「私、どうしたらいいんだろ……」

みんなそれぞれに走る理由があつてあの峠を走つてゐる。でも私は、美渡ねえや志満ねえが乗れて言うからはずつと乗つて、あの道もずつと走つてたから速いだけで、走る理由なんてなかつた。

みんなと競つたり、それで仲良くなれた人が増えたりするのが楽しかつたから私はみんなと一緒にいただけ…。速く走る理由なんて、どこにもない。

あの日のバトルだつて、本当は花丸ちゃんの方が走りたかつたはずなのに、私が勝つたからつて譲つてくれた。それなのに私、全然走れなかつた。

私、もしかしたらあのチームにいるべきじゃないのかもしれない。

千歌「……」

チカチャーン……

曜ちゃん、あの時すごく心配してくれてたのになあ……。きつとあの時、私が悩んでることバレてたんだらうなあ。

ちかちゃん！

なにか一緒にしたいつてずつとずつと思つてたのにできなくて、心配してくれたのに打ち明けられなかつた。これじゃ友達失格かも。

千歌「ずつと一緒にいたのになあ……」

曜「ちーかちゃんっ!!」

千歌「あ… 曜ちゃん…」

千歌「… って！曜ちゃん!？」

曜「ヨーソロー！渡辺曜であります！」

千歌「なんでここにいるの!?! 終バスもう終わっちゃったのに! うわ、汗びっしょりじゃん!」

曜「ふっふっふ、千歌ちゃんのためなら自転車でだって駆けつけるよ!」

曜「ずっと一緒にいた仲なんだよ? 千歌ちゃんの悩み、聞かせてよ。」

私、バカチカだ…

こんなに私のことを思ってくれる友達がすぐそばにいてくれたのに、一人で勝手に塞ぎ込んで、みんなから逃げるような事までして…

千歌「… しいよ…」

千歌「私、悔しいよ!!」

千歌「鹿角さんたちに負けたのも悔しい! だけどそれ以上に! 応援してくれたみんなの気持ちに答えられなかった自分が! 走る目的なんかないのに何となくで花丸ちゃんからチャンス奪ったことが! 悔しいんだよ!!」

曜「… やつと言ってくれた。」

曜「走る理由は必ず、千歌ちゃんの中の心の中にあるはずだよ。今はそれに気づいてないだけ。そうじゃなかったら、千歌ちゃんはこんな風に悔しいって思えないよ。」

千歌「でも、本当に思いつかないよ…！」

曜「だったら今度のバトル、一緒に走ろうよ！今すぐには見つからないなら、千歌ちゃんが見つけられるまで私がサポートする！」

千歌「え…？」

曜「私、ずっと千歌ちゃんと一緒になにかしてみたかった。千歌ちゃんの力になれたらってずっと思ってたんだ。だからきつと、今がその時なんだよ！」

そうだったんだ… 私と曜ちゃんの気持ちはずっと一緒だったんだ… !!

千歌「曜ちゃん、ありがとう!!」

曜「今度のバトル、絶対に勝とうね!!」

第2部 第5話 千歌復活

聖良「あなたは…… 戦う意思のない人とはバトルしませんよ。前回のバトルでそれは分かっているはずですよ。」

理亞「アンタ、どこまであたし達をバカにすれば……！」

千歌「この前は、私の勝手な理由でバトルを中断してしまつて、本当にすみませんでした。」

千歌「私は聖良さん、理亞さんともう一度バトルしたいです。だから来ました。」

聖良「でも、この前のあなたにはバトルする理由はおろか、走る理由すらないように見えました。こんなことを言うのは申し訳ないですが、そんな状態でバトルしても結果は同じだと思いますが。」

千歌「聖良さんの言う通り、私には走る理由がありません。でも、だからこそ私はバトルしたいんです。私が走る理由を見つげるために。それに、私はひとりじゃありませ

ん。」

曜「今日のバトルは、私も乗って行おうと思います。いいですよね？」

聖良（なるほど…… 私たちと同じように走ろうと言うわけですか。これなら彼女の本当の走りを見られるかも知れませんか。）

聖良「はい。構いませんよ。千歌さんの考えもよく分かりました。このバトル、受けて立ちましょう。」

理亞「姉様……！」

聖良「千歌さんの意志の強さは彼女の目を見ればよく分かります。全力で迎え撃ちましょう、理亞。」

理亞「……。」

ルビイ『ゴール前、準備整いました！いつでも大丈夫です！』

梨子「コースの準備はOKです。聖良さん理亞さん、準備は大丈夫ですか？」

聖良「ええ。いつでも大丈夫ですよ。」

理亞「はい。大丈夫です。」

梨子「千歌ちゃん曜ちゃんも、準備大丈夫？」

千歌「いつでも大丈夫。」

曜「私も大丈夫だよ。」

梨子「千歌ちゃんをお願いね。」

曜「分かってる。必ず勝たせてみせるよ。」

梨子「…ありがとう。」

梨子「それじゃあカウント行きます！」

梨子「5！4！3！2！1！」

フォン!!!フォン!!!フォオオオオン!!!

ヴォン!!!ヴォン!!!ヴォオオオオン!!!

梨子「GO!!!」

フォオオオオヴァアアアアアアアアアアアア

ヴォオオオオオバアアアアアアアアアア

梨子「始まったわね。頼んだわよ、曜ちゃん…」

曜「このまま前に出よう！」

千歌「分かった！」

フアアアアアアアアアアアアアアアアアアアア
!!!!!!

理亞「この前同じやり方で負けてるのに、同じ手を使ってくるなんて。」

聖良「普通に考えれば悪手。クレバーだとは言い難いですね。ですが敢えてそういう手を取るということは、向こちらにも何か考えがあるということでしょう。」

バアアアアアアアアアア

曜「次、緩めの右の後にキツイ左カーブ来るよ！」

千歌「分かった！ちよつと我慢してね！」

ファンンン ファンンン!!!

ファアアアアアアアアアア!!!!!!

ギヤアアアアアアアアアア!!!!

曜（すごい横G！今まで体感したことない!!こんな速度で千歌ちゃんはいつも走って

るんだ・・・！）

聖良（あのコーナリング、やはり伊達ではありませんね。あとはその走りを生かせるモチベーションだけです、どうカバーするんですしようか。）

曜「次、右のヘアピンカーブ来るよ！」

ファアアアアアアアアアア!!!!

ギヤギヤギヤギヤ!!!!

千歌（曜ちゃんすごいよ・・・この先がどうなってるのか考えなくても走れるから、運

転に集中できる！これなら、勝てるかもしれない！）

花丸「第1セクション伽藍山駐車場すら。もうすぐ2台が通過するぞら！」

ダイヤ「分かりましたわ。そのまま順位を教えてください。」

ルビィ『千歌さん、大丈夫かなあ？』

花丸「きつと大丈夫ぞらよ。今度は絶対に負けないぞら！」

∴ フアアアアア ∴ ∴ バアアアア ∴ ∴ ギャアアアア

花丸「来たぞら!!」

フアアアアアアアアアアアア

バアアアアアアアアアア

花丸「千歌さんが先ぞら!!」

花丸「千歌さんが先頭で、少し遅れてインプレッサが後ぞら!千歌さんが勝ってるぞら！」

ら！」

ダイヤ「そうですか∴∴！分かりましたわ。ありがとうございます。」

ダイヤ（本調子に戻りつつありますわね∴∴ですがその先は高速セクション、気を抜いてはなりませんわよ。）

曜「ここからはカーブがあまりないよ、相手が追い上げてくるから気を付けて！」

でしようか。どちらにせよ冷静さは取り戻しているはずですね。

曜（チャンスは必ずある……この先に！私が千歌ちゃんを勝たせてみせる！）

善子「うげ！また霧出てきてんじやないの！リリーに連絡しとこうかな。」

プルルル

善子「もしもしリリー？」

梨子『よっちゃんどうしたの？』

善子「そこはヨハネでしょ……あせびヶ原駐車場なんだけど、また霧が出てきたわ。」
梨子『またなの！？ちよつと苦しい展開になりそうね……一般車や事故に注意して。他の皆には私から伝えておくわ。』

善子（今回は曜が付いてる。前と同じ結果にはならないはず……信じてるわよ、曜！）

……バアアアアア …… ファアアアアア

果南「お、近づいてきたね。ダイヤに電話しとくか。」

果南「あ、ダイヤ？戸田駐車場なんだけど、もうすぐ通過するよ。」

でも！

今は隣に曜ちゃんがいる。私の一番のともだちが、私の代わりに道を教えてくれる！だから、霧だつて真つ暗闇だつて迷わずアクセルを踏める！

千歌「曜ちゃん。私、曜ちゃんを信じるよ。」

曜「…任せて。ふたりに絶対勝とうね！」

千歌「うん!!」

曜「次は左から始まる6連続力!!ブだよ!さあ、アクセル全開で行こう!」

フアアアアアアアアアアアアアアアアアア

ギアアアアアアアアアアアアアアアアアア

千歌「ひとつ!」

ギアアアアアアアアアアアアアアアアアア

曜「ふたつ!」

ギアアアアアアアアアアアアアアアアアア

千歌「みつつ!」

曜「見えた!!」

聖良「!!」

千歌「うわっ!!」

ツギヤアアアアア

曜「そのまま最後!!インベタで!!」

千歌「う、うん!!」

フアアアアアアアアアアアアアアア
!!!!!!

ギヤアアアアアアアアアアア
!!!!!!!

聖良（オーバーテイクした…）

5つ目のコーナーのアウト側は崖… コースアウトすればタダではすまない状況、しかも実際、コーナリング中に路面のギャップでバランスを崩しかけた… それでも尚加速し続けるあの意志の強さ。今ハッキリとわかった。私たちは、とんでもないドライバーを相手にしている！）

第2部 第6話 決着、そして波乱の予感

聖良「理亞、ゴールまであとどれくらいですか？」

理亞「あと3分の1切ってる。このままじゃ……！」

聖良「ええ、分かっています。逆転のチャンスは残り僅か。全力でアタックをかけるのみです。」

理亞「!!」

(姉様が全力を出す……！この道はおろか、函館でも久しく出していないというのに！)

あの二人はそれだけの實力を持つていると、姉様は認めたんだ……！)

ヴオオオオオオオオアアアアア

!!!!!!

曜「後ろは気にしないで、目の前の道に集中してね！」

千歌「分かった！」

聖良「オーバースピードです、曲がれません!!」

千歌「曲つつがれええええ!!」

曜「う、うわああああああ!!」

ギヤギヤギヤギヤギヤアアアアアアアアアアアア
!!!!!!

理亞「あれは…!」

聖良「慣性ドリフト!!」

今までグリップ走行だったから思いもしなかった…まさか、ドリフト走行も駆使し

てくるなんて…!!

しかも慣性ドリフトなんて高度なテクニクを!

千歌「行けた…!」

ダイヤさんに教えてもらった走り方、もしかしたらブレーキなしでも行けるんじゃないかな

いかと思って試してみたけど、やっぱり行けた!

このまま残りのカーブも全部これで行こう!!

フアアアアアアアアアアアアアアアア
!!!!!!

理亞「…」

聖良「……悔しいですが、あれだけのテクニックとスピードでは、今の私では到底太刀打ちできませんね……」

理亞「そんな……！ 姉様が負けるなんて、私信したくない！」

聖良「理亞。勝負というのは勝者がいれば必ず敗者がいる。当たり前のことです。今回の相手……千歌さんの方が強かった。だから私たちは負けた。たったそれだけのことですよ。」

理亞「でも……！ 姉様と私なら、どんな相手だって倒せると思ってたのに……！」

聖良「ええ、私もそう思っていました。私と理亞の二人なら勝てると。完璧だと。でもそれは慢心だったと教えてくれたのがあの二人です。完璧だと思っていたテクニックにも、まだまだ改善する余地があったということです。」

理亞「うう……」

聖良「負けたことは確かにシヨックですが、またいつかりベンジすればいいんですよ。今回の千歌さんみたいに。腕を磨いて、次は勝ちましょう？ 理亞。」

理亞「……うん。」

千歌「本当にありがとうございました！一度負けてるのに、再戦にも快く応じてくれて！」

聖良「いえ、全然構いませんよ。それにこちらこそ、ありがとうございました。まだまだ自分たちのテクニクにも改善の余地があると分かりましたから。とても有意義なバトルでした。」

千歌「それを言うなら私も聖良さんたちのおかげで、自分が走る理由を考えるきっかけができました。聖良さんたちとバトルしてなかったら、これからもずっと何となく走ってたと思います。」

聖良「走る理由、見つかるといいですね。またいつか、チャンスがあればその時は再戦をお願いします。」

理亞「次は…絶対負けないから。」

千歌「その時は全力で受けて立つので、よろしくお願いします！」

千歌「あ、でも！」

聖良「？」

千歌「バトルじゃなくても、またいつでも来てくださいね！沼津も内浦も、とつてもいいところなので！」

聖良「ええ！またお邪魔しますね。その時は案内してもらってもいいですか？」

千歌「もつちろん!! チームのみんなで案内しますね!!」
聖良「また会える日が楽しみです!」

「学校にて、昼休みー」

花丸「すごいぞら〜〜!!!」

ルビィ「結果は直後に聞いてたけど、やっぱり凄いです!」

千歌「いや〜もう、曜ちゃんがいなかったら間違ひなく負けてたよ!」

曜「でも、気付いたらバトルも終わってて、鹿角さんたちも帰った後だったんだけどね…」

梨子「最後の最後で失神しちゃったんだっけ?」

曜「そうなんだよ、怖いとかそういう次元飛び越えちゃってたよ。」

千歌「ほんつつつとにごめんね曜ちゃん!!」

梨子「一体何したのよ…」

千歌「前にダイヤさんに教えてもらった、えーなんだっけ、ドリアンみたいな名前のやつ!」

花丸「ドリフトずら」

千歌「そうそれ！それをね、教えてもらったのはブレーキ使ったやり方だったんだけど、もしかしたらブレーキなしでも行けるかなって思ってたやってみたんだ！」

ルビィ「それって…」

梨子「ええ、間違いなく慣性ドリフトね… 千歌ちゃん、つくづく怪物みたいなセンス持つてるわよね…」

花丸「そりゃあ曜さんも気絶するわけずら。」

曜「あの走り方で速いなら、これからずっとそれで走ってもいいんじゃないかな？」

梨子「いやいや！あなた気絶するほど怖いんじゃないの!?普通やめてとか言うでしょう！」

曜「そつちの方が速いならいいじゃん？私は頑張って耐えるだけだし。」

ルビィ「ピギィ！ストイックすぎる…」

花丸「幼馴染もなかなかの怪物ずら…」

千歌「それがね、あれやるとタイヤがボロボロになって、未渡姉に『タイヤいくらすると思ってるの？』ってめっちゃくちや怒られるからあんまりやりたくないんだよね。次の日の朝怒られて、わけわかんなかったよ。」

梨子「あんな魔改造車作ってにおいて今更ケチることないでしょうに…」

花丸「ところで！みんなは今夜走るずら？」

梨子「今のところ予定もないし、呼ばれたら行くけど…何かあるの？」

花丸「善子ちゃん、『だいたい腕が上がったと思うからちよつと見てほしい』って言うてるから、見てくれる人がいたらなつて。」

梨子「そういうことなら。」

ルビイ「ルビイも大丈夫だよ！」

曜「私も大丈夫だから、善子ちゃんと一緒に向かうね。」

千歌「ごめくん、今日は私無理だ、家の手伝いあるんだ。」

曜「そうなの？珍しいね、夕方からお手伝いなんて。」

千歌「うん、なんか大事なお客さんが来るらしくて、その準備で忙しいんだつて。」

ルビイ「千歌さんのお家、歴史ある旅館ですもんね。どんな人なんだろう？」

千歌「すつごい有名人らしいんだけど、私に教えるとろくなことにならないからつて詳しく教えてくれなかつたんだ。」

梨子「そうなのね…。」

千歌「まあそういうわけで、今日には行けない！ごめん！」

(わ：一人ともすごい美人さんだ：：ていうか、どこかで見たことある顔：：)?? 「ええ。事前に予約させてもらってたわ。」

千歌「えーと：：」

真姫「西木野よ。」

千歌「すみません：：あ、ありました。お部屋はもう準備できてるのでご案内します。」

真姫「ありがとう。」

にこ「へえ：：！外から見るとこぢんまりとしてるのに、中は意外と広いのね。部屋も十分大きいし。」

千歌「ありがとうございます！で、ではごゆっくり：：」 ススス：：

ふいふ、緊張した。なんでいきなり接客なんか任せるかなあ。優しそうな人たちでよかつた。

でも、やっぱりどっかで見たとあるんだよね：：どこだったっけなあ、最近見た覚えがあるんだけど：：！

千歌「スポーツカーが止まってる。あの人たちのかなあ？」

白くて丸いライトの車と、真っ赤で切れ長のライトの車の2台、どっちも速そう。

花丸ちゃんとかダイヤさんが見たら喜びそうだなあ。まあお客さんの車だし教えられないけどね。

そんなことより！これから色々手伝わないといけないから、忙しくなるぞー！

第2部 第7話 憧れの的

ダイヤ「以前と比べたら、格段に上達していますわよ。」

善子「そう?」

ダイヤ「ええ。ハンドリングから伝わってきた不安な感じもだいぶなくなりまして、アクセルワークやブレーキングも洗練されて、安定感のある走りになっていましたわ。」

善子「よかったあ。ダイヤさんにそう言ってもらえるなら自信が付くわ!」

花丸「5. 5LでV8のモンスターマシンをこれだけ扱えるなら十分なレベルすら。まだまだ改善点はあるけど、それはこれから地道に取り組んでいけばいいすら!」

善子「あの厳しかったはずら丸が…! ああ、正しく今日こそラグナロクの日!」

果南「でも油断しちやダメだよ? 心の余裕がなくなったら、今まで練習してきたことがちゃんと発揮できなくなるからね。一番は平常心を保つことだよ。」

善子「我は天界を追放されし墮天使ヨハネ… ちよつとやそつとのアクシデントでは

動じぬ……」

梨子「またそんな調子のいいこと言つて……事故つても知らないわよ？」

曜「まあまあ！これで善子ちゃんも走り屋の仲間入りつてわけだね！」

ルビィ「やつたあ！善子ちゃん、今度一緒に走ろうね！」

善子「フツ……今度と言わず、今からでも遅くはないぞ？……あとヨハネ」

ダイヤ「そうしたい気持ちはわかりますが、皆さん明日も予定があるのでしようし、今日はこの辺でお開きにしましょうか。」

梨子「ええ、そうしましょうか。」

……ウオオオオオオオオオオオ

……ヴオオオオオオオオオオオ

曜「スポーツカーだ！2台も来たよ！」

花丸「ポルシェと90スープラすら……どっちも戦闘力の高い車すら。」

ダイヤ「こんな時間に来るといふことは、ただのドライブ目的ではないでしょうね。」

梨子「どうします？あの2台の走りを見てから帰りますか？」

ダイヤ「……いえ。興味はありますがわたくしは明日の朝が早いですし。皆さんも予定があるのでしようから長居は無用でしょう。帰りましょうか。」

バタン

にこ「それらしき車はちらほらいるけど、そう多くはないわね。」

バタン

真姫「羽目を外して走れる場面ってこういう時くらいしかないから、ギャラリーは少ない方がローリスクだわ。」

ダイヤ「ん?…え^ッえ^ッっ!!!」

ルビィ「ピギヤツ!ど、どうしたのお姉ちゃん!」

ダイヤ「ルビィ!あれを見なさいルビィ!!」

ルビィ「あれって… あ、あわわ、あわわわわわわ!!!」

ダイルビ「まさか!まさか!まさか!まさか!」

ダイルビ「『BiBi』の二人だあー!」

善子「えっ、なんか黒澤姉妹のアリストめつちや騒がしいんですけど?」

曜「何かあったのかな?ちよつと聞きに行ってみようか。」

善子「そうね。ちよつと心配だし。」

バタン

善子「外まで聞こえてるわよ？ちよつと大丈夫？」

曜「何かあつたの？」

ウィーーン

ダイヤ「あなたたちは…」

ようよし「あなたたちは？」

ダイヤ「…今すぐここから立ち去りなさい!!!わたくしとルビイはここに残りますわ

!!!

ようよし「は、はいいいい!!!」

ダイヤ「他の方も!!!良い子は就寝の時間ですわよ!!!とつとと帰りなさい!!!」

果南「うわ…ダイヤなんか喚いてる。ちよつと止めてくるよ…ダイヤ! 恥ずかしいからやめな!」

真姫「なんか向こうが騒がしいわね…」

にこ「ギャラリーの注目も向こうに行つてゐる事だし都合ね。今のうちに一本走つてくわよ。」

真姫「極力静かになるようにね。」

ウウオオオオオオオオオオ……
 ヴオオオオオオオオオオ……

果南「他の人も見てるから喚くのやめなつて！」

ダイヤ「果南さん！止めないでくださいまし!!これは私にとつて一世一代の大!!チャ
 ン!!ス!!!この気を逃す訳にはいきませんの!!」

果南「うるさい!!網元の娘がみつともない!わけわかんないこと言つてないでさつさ
 と帰るよ!」

ルビィ「あー!お姉ちゃん!!あの二人が!!」

ダイヤ「え?んまー!私としたことが見逃すとは!!追いかけますわよルビィ!!」
 ルビィ「うゆ!!おねいちゃあのためならルビィ、がんばルビィするゆおー!」

ダイヤ「というわけで退きなさい果南さん!怪我しますわよ!」

果南「え、あ、はい!」サツ

ブアアアババババババ!!!!

パパパパン!!!!

キアアアアアアアアバアアアアアアアアアアアアア

ウバアアアアアアアアアア……

!!!!!!!

……

花丸「……竜巻でも起こったずらか……？」

バアアアアアアアアアアアア

ダイヤ「もつとスピードあげなさいルビィ！それではあの二人を見失いますわよ！ほらもつとコーナー突っ込むのです！」

キャキャキャキャ

ルビィ「うゆゆゆ……踏んば……ルビィいい！」

ガッ!! ガリガリイ!!!!

ルビィ「ピギィ!!アリストしゃんのエアロがあ!!」

ダイヤ「エアロ擦ったくらいでみつともないですわよルビィ！大和撫子たるもの、エアロなどガリつてナンボですわ！気持ちを強く持つのです！」

何としても私はあの二人に直接会わなければならない……私にはそうする義務がある……

何故ならば……

私は絢瀬絵里のファンだからですわ!!!

私がスクールアイドルを目指したのは、μ's がきっかけですわ。その中でも絢瀬絵里、彼女に強く憧れましたの。凛として美しいパフォーマンスを見た時、私は彼女のようなスクールアイドルになつて輝きたいと強く強く願いましたわ。夢破れたあとも彼女への憧れだけは消えませんでした。μ's が解散になったあとも、矢澤にこ、西木野真姫、絢瀬絵里の3人で『BiBi』というユニットを結成し、超人気アイドルユニットへと瞬く間に盛り詰めました。スクールアイドルという肩書きがなくなつてもなお色褪せないその魅力とカリスマ性があつたからこそ、私はずっとファンでいられたのです。

そして今しがた、その『BiBi』のメンバーのうち二人が目の前にいました。せめてこの思いを、今までの感謝を伝えられるなら！このチャンスを逃してはならないのです!!

ダイヤ「ルビィ！もつと出ないのですか!？」

ルビィ「こ、これ以上は無理だよお!!」

ダイヤ「ぐぬぬぬ…ルビィ！運転を変わりなさい！わたくしが運転しますわ!」

バアアアアアアアアアア

ギヤギヤギヤアアアアア
!!!!!!
!!!!!!

ダイヤ「絶対に追いついてみせますわよ!!」

ヴオオオオオオオオ……

善子「ダイヤさん、すごい剣幕だったわね……」

曜「幼馴染の果南ちゃんですら追い返してたよ。それにいきなり飛び出していつちゃうし。一体何があつたんだろう?」

善子「まさか、伝説の悪魔であるルシファーが憑依した!?それなら何とかしてヨハネの下僕として使役したいものね……」

曜「いやそれはないから……つてうわ!見てこの道!すごいブレーキ痕だよ!」

善子「絶対ダイヤさんとルビィのじゃない……ここまでして追っかけるってことは、目的はやっぱりあの2台で間違いないわね。」

ルビィ「あ!見えた!テールランプの光だよ!」

ダイヤ「捕まえましたわよ……! B i B i、覚悟お!!」

バアアアアアアアアアア!!!
ここに……なんかややこしい! そうなのが1台、遠くから来てるわね。」

真姫『宿はもうすぐそこだし、さっさと宿に入つてやり過ぎるのがいいと思うわ。』

ダイヤ「あそこの駐車場を見なさい、ルビィ。」

ルビィ「ほんとだ！さっきのポルシエとスープラだ！」

よりにもよって我がチームメンバーの家に宿泊してくださいるとは…これは一気に
エリーチカへ近づきましたわよ。

待っていてくださいまし！エリーチカ！！

第2部 第8話 ダイヤの執念

フオオオオオオオオン…

千歌「ふわ… 眠いなあ…」

プルルル プルルル

千歌「誰だろ、こんな時間に… って、ダイヤさんだ。車止めよ。」

ヴオボボボボボ…

千歌「もしもし？」

ダイヤ『こんな朝早くに申し訳ありませんわ。』

千歌「家の手伝いしてたから大丈夫ですよ。でもどうしたんですか？こんな時間に電話なんて。」

ダイヤ『その事なんですけど、ひとつお聞きしたいことがございましてね。』

千歌（急に改まった… なんか嫌な予感がする…）

ダイヤ『千歌さんのお宅に、有名な方ってご宿泊されてますわよね？』

千歌「い、いや〜? そんなお客さんはうちには泊まつてなかったようなく〜」

(やつぱりあの二人、有名人だったんだ。でもだからつてダイヤさんにだつて教えられないよ! 教えて広まっちゃつたら私が怒られるんだもん!)

ダイヤ『そうですか。では少し質問を変えましょう。十千万旅館に『西木野』か『矢澤』名義で宿泊しているお二人を知りませんか?』

千歌(うちに泊まつてることどころか、名前まで分かつちやつてるよ〜! 尚更教える訳にいかないじゃん!!)

千歌「い、いやあく、なんのことだかさつぱり。たはは。…」

ダイヤ『ふむ。あくまで口は割らない、ということですか。』

千歌(口ぶりが頭脳派の悪役みたいになつてるよ。!)

ダイヤ『分かりましたわ。あなたが口を割らない以上、こちら実力行使に出るまでですわ。では。』ピッ

千歌「え? 実力行使?」

……バアアアア……

千歌「つつうわあああく〜」

……キヤキヤキヤ……バアアアアア……

千歌「嫌ですよ！お客さんのこと勝手に教えるわけないじゃないですかあ！」

ダイヤ「そんなものそちらの都合ですわ！いいから教えなさい！」

千歌「いくやくでくすくす!!」

ダイヤ「分かりましたわ！どうしても口を割らないのであれば、このフルストレートアリストの爆音をここで響かせるまでですわ！覚悟しなさい!!」

千歌「そんなことしたら、ダイヤさんと縁切りますよ！」

ダイヤ「そんな!?クツ…卑怯な…！」

千歌（あつさり食い下がった!?)

未渡「コラアバカチカ!!朝っぱらからうちの前で何騒いでんの!!」

千歌「うげ！未渡ねえ！最悪だあ…！」

ダイヤ「ほれみなさい！縁を切るなどと脅した天罰ですわ！」

未渡「アンタもだよ！こんつなうるさいアリストでウチまで乗り付けてきて、一体どういうつもりなの!!」

ダイヤ「ピギイ！す、すみません…！」

真姫「朝から賑やかね。」

一同「!!」

未渡「こんな朝早くに申し訳ございませんお客さま〜！」

真姫「ああ、私は別に……眠気覚ましに浜を歩いてただけだから。」

真姫「それよりそのあなた、私たちに何か用があるんでしょ？そのアリスト、この前私たちを追っかけてきたのと同じだし。」

ダイヤ「ピギツ!!え、えと、その、あの……」

「こ「ちよつと真姫ちゃん!先に起きたんならにこも起こしてよ〜!」

真姫「ちよつ!にこちゃん!人前で『ちゃん』付けはしない約束でしょ!?!」

「こ「どーせ誰も気にしないわよ……ってこのアリスト!この前の!」

真姫「そう。この子の車みたい。」

ダイヤ「あ、あの!!私、『B i B i』の大ファンで!それで、それで……」

「こ「なるほどね……だからこの前ずつと追っかけて来たわけね。ってことは、あの夜にこ真姫が車に乗ってるのも見てるってことね。」

ダイヤ「は、はい!2台とも、すぐくお似合いでステキでしたわ!」

「こ「アンタ、チームとか入ってるの?」

ダイヤ「あ、はい!走り専門ではないですけど、一応あの峠最速ということになつてますわ!」

「こ「ふ〜ん……」

真姫「はあ……ほどほどにしてよね。にこちゃん。」

ダイヤ「？」

にこ「じゃあさ、アンタのチームとにこたちでバトルしましよ。そつちが勝つたら言うこと聞いてあげるわ。」

ダイヤ「え!？」

にこ「ただし!アンタはバトルに出ちゃダメよ。」

ダイヤ「ええええ!!!」

未渡「…何がどうなってんの、これ？」

千歌「さあ…」

―昼、学校にて―

曜「それで、その『B i B i』って言う人たちとバトルすることになったんだ？」

ルビィ「はい。だけど、お姉ちゃん以外のメンバーがバトルするのが条件らしくて…」

花丸「主力中の主力が走っちゃいけないなんて、手痛いハンデずら…」

梨子「千歌ちゃんはお家のお手伝いがあるからダメだし。果南さんはどうなの？」

ルビィ「この前お姉ちゃんが戸田の駐車場で騒いだり、千歌さんのお家に迷惑かけたことに怒っちゃって、『そんなくだらしないことには絶対に手を貸さない』って、断られました。」

梨子「うくん、自業自得だけど手痛いわね…」

曜「そうなる…花丸ちゃんは確定として、残り一人…梨子ちゃんかルビィちゃん、かなあ。」

花丸「そもそもこれって、絶対に勝たないといけないバトルずら？」

花丸「話を聞く限りだと、オラたちが負けた時のことは何も言われてないんだし。バトルする以上全力で挑むのは当然だけど、デメリットがないんだから、何もエースが走ってことはないと思うぞら。」

一同「確かに…」

花丸「だからオラは走る気はないぞらよ。」

曜「あ、そうなんだ…」

(そりやそうか。)

ルビィ「なら、今回のバトルはルビィが出てもいいですか？」

「元はと言えば、お姉ちゃんがみんなに迷惑をかけて生まれた話だし、お姉ちゃんが走れ

ない分、勝てなくてもルビイが走りたいです。」

梨子「異論なしよ。でも、絶対に無理はしないでね。」

ルビイ「はい！」

曜「なら、残るはあと一人……」

花丸「じゃあ、オラは保健室に行ってくるぞら。」ガタツ

梨子「えっ？ どうして？」

花丸「残りの出走者を決めるに行ってくるぞら！」

ー保健室ー

「……」

いつまでもこんな調子じゃ、ダメダメね……

勇気を出さなきゃ、これから先は変わらない。分かってる、分かってるんだけど……

善子「やつぱりダメだあ〜」

花丸「失礼します。2年1組国木田花丸です。」ガララツ

花丸「善子ちゃん、いつまでも惰眠を貪ってちやダメだよ。」シヤツ

善子「『堕眠』……それは、天界を追放され人の世に降り立った堕天使が、秘められし

力を解放するために必要不可欠な儀式……何人たりともその眠りを妨げてはならない……おやすみ」

花丸「漢字が違うぞらよ。そんなんじや、せつかくルビイちゃんや他のみんなと仲良くなつたのに、一緒に過ごせる時間が少ないまま卒業しちゃうよ？」

善子「……分かつてる、けど……」

花丸「まあそれはそれとして、善子ちゃん、バトルに興味はないぞら？」

善子「バトル？ないことはないけど……私が走つたところで結果は分かつてるでしよ。」

花丸「それはやってみないと分かんないぞら。それに今回ののは負けても何も問題ないから大丈夫ぞら。」

善子「それってほんとにバトルって言うの？つまりは誰でもいいってことよね。」

花丸「そういうこと。善子ちゃん、練習して走りは良くなってるから、実際にバトルして雰囲気を感じておいた方がいいと思つたぞら。」

善子「そういうことなら……でもあんまり期待しないでよね？私プレッシャーに弱いし、他の人に比べたらそんなに上手くないし。」

花丸「心配しなくて、みんな善子ちゃんに期待するし応援するぞらよ！」

善子「なんでよ！」

花丸「だって善子ちゃんは大事なともだちだし、同じチームメイトだから。走る以上はやっぱり勝ってほしいし、負けたとしても笑ったりガツカリする人なんていないですよ。だから自分のやってきたことに自信を持って走るすら！」

善子「すら丸……！」

「フツ、良かろう……この墮天使ヨハネ、秘められた力を全て解放して、

戦いに臨もう……！」

「しかと刮目せよ!!!」

第2部 第9話 エキシビジョンマッチ

ダイヤ「ちよ、ちよつと待っててください！何故そんな采配なのですか!？」

梨子「いや、そう言われても…」

ダイヤ「バトルするからには勝ってもらわなければ困るのです！百歩譲ってルビィはともかく、善子さんはまだ未熟！到底あの2台には勝てるとは思えませんわ!」

「果南さんと花丸さんに出ていただきたいですわ！梨子さんでも構いませんわ!」

鞠莉「ダイヤったらワガママねえ。Ladyがワガママなんて言っちゃNoよ?」

果南「それに！ダイヤが勝ちたいってのも、勝ったらあのアイドル2人に言うこと聞いてもらえるからでしょ？そんな理由であたしらを引っ張りだそうとしても無駄だよ。」

花丸「そうずら。ダイヤさん自身が出るならまだいいけど、出られないからってオラたちをこき使うのは違うずらよ。」

曜「まあそんなわけで、あくまで『交流戦』ってことで！だからすみませんダイヤさ

ん！ここはこらえてください！」

ダイヤ「そんなあゝゝゝ！」

善子「ダイヤさんって意外と子供っぽいところあるのね。」

ルビィ「お姉ちゃん、普段は真面目でしっかり者だけど、たまにあんな感じでワガママになっちゃうことあるんだ。ルビィはそんなお姉ちゃんも大好きだけどね！」

善子「あ、アンタがそれでいいならいいんじゃないの……。」

―数日後―

にこ「さて、揃ったわね。オフィシャルはそつちに任せるわよ。」

ダイヤ「分かりましたわ……。みなさんは事前に伝えておいたポイントで待機しておいて下さい。ルビィと善子さんは各自の車で待機。」

一同「はい。」

真姫「にこちゃん、あれ見て。LCよ。」

にこ「この子たち、全員にこたちより年下よね？とんだセレブもいたもんだわ……。あれがバトル相手の車じゃなくて良かったわ。」

果南「そういえば鞠莉、LFAじゃないんだ。あれどうしたの？」

鞠莉「とつてもシャイニーでお気に入りだったんだけどね、パパのお友達でどうしても欲しいって人がいたから譲っちゃったわ。」

果南「あれ譲るんだ・・・お金持ちは規模が違うねえ。」

梨子「善子ちゃんとルビイちゃん、大丈夫かしら・・・？」

花丸「ルビイちゃんはダイヤさんの運転を傍でいつも見てたし、実際の走りもそこそこ速いから大丈夫とは思うけど・・・」

曜「問題は善子ちゃんだね。上達してきたとはいえバトルは未経験・・・しかもデビュー戦が2対2っていう、あまりやらないバトル形式だし。プレッシャー慣れしてないから不安だね。」

梨子「負けてもいいから、どうか無事に走りきって欲しいわ・・・」

ルビイ「善子ちゃん、大丈夫？」

善子「こつ、これくらい！墮天使にとつてはどうって事ないわよ！このだ、墮天使ヨ、ヨヨ、ヨハネに任せなさい！」

ルビイ（善子ちゃん、すごく緊張してる・・・！ほぐしてあげなきゃ・・・そうだ！）

ルビィ「善子ちゃん善子ちゃん！」

善子「な、なによ！」

ルビィ「がんばルビィ!!」

善子「・・・フツツ！なにそれおつかしい！」

ルビィ「善子ちゃん笑った！ルビィのおまじないだよ！これをする、すつごく勇気が出てくるんだよ！」

善子「ルビィ・・・ありがとね・・・」ボソツ

ルビィ「うゆ？何か言った？」

善子「な、なんでもないわよ！それよりもうすぐ始まるわよ！」

ルビィ「そうだね！準備しなきゃ！」

善子「ルビィ！」

「勝ちましょうね！」

ルビィ「うん!!」

ここに「ドライブモードは『NORMAL』に・・・まずはお手並み拝見と行こうじゃないの。真姫、準備はいい？」

真姫「ええ、こっちは大丈夫よ。向こうの2人も準備できてるみたいだし、そろそろ

一度もない……無敵の戦法なのよ！」

真姫「そこまで言うなら止めないわ。先行は私でいいのよね？」
 にこ「ええ。いつも通りよ。」

曜「カウントいきまーす！」

ルビィ（果南さんはああ言ってたけど、やるからには勝ちたい！ルビィにも戦える力があるって証明したいし、お姉ちゃんの望みを叶えてあげたい……！）

善子（始めから全力で行くわよ。今の私の実力が一体どれくらいなのか、ここで見ておきたい。それで負けるようならその程度ってことよね。）

曜「……2！1！GO！！」

フヴオオオオオオオオ

バアアアアアアアア

キュキュキュキュ

果南「ルビィのアリストが先頭だね。」

ダイヤ「ルビィー！そのままぶつちぎりなさいー！！」

鞠莉「スープラ、911と続いて墮天使ちゃんが最後尾かあ。」

果南「あの二人の走り方、なんか嫌な予感がするなあ……」

フオオオオオオオオオオ：

善子「最初はこれでいいのよ…後から追いついて度肝を抜いてやるわ！この墮天使ヨハネを甘く見ない事ね…。」

フオオオオオオオオオオ：

にこ「さてさて、後ろの彼女は一体どこで仕掛けるつもりかしら？楽しみねえ。」

ヴオオオオオオオオオオ…パパパパ！

真姫「最初のターゲットはあのベントツの子ね。可哀想だからあまりやりたくないんだけど…。」

バアアアアアアアアア！！

ルビィ「BiBiのふたりがあまり追ってこない…様子見してるのかな？」

善子「早速で悪いけど、前のを追い越そうかな！我が実力を目の当たりにして、恐れおののくがいい！！」

フオオオオオオオオオオ！！！！

にこ（案外早いタイミングで仕掛けてきたわね。流石AMGなだけあって、加速力もコーナリング性能もピカイチね。）

にこ「ドライバーが上手いかどうかは別だけどね。」

善子「やったあ！私だってやってやれないことなんてないのよ！」

キュキュキュキュ… バアアアアアアア…

花丸「スキル音が近くなってる！もうすぐ来るぞらよ！」

バオオオオオオオ!!!

カッ

花丸「あの爆光フォグ、ルビイちゃんが先頭ずら！」

梨子「後ろを突き放してる!!すごいわルビイちゃん！」

パパパパ!! ヴオオオオオオオ!!!

フヴァアアアアア!!!

ヴオアアアアア!!! ボボボツ!!!

花丸「3台固まって突っ込んできた!？」

梨子「スープラ、SL、911の順だわ! 頑張るのよっちゃん! 前との差はほんの

少しよ!」

花丸(違う、そんな雰囲気じゃなかった… 善子ちゃんのドラテクがまだ発展途上だということ差し引いても、善子ちゃんには余裕がないように見えた… ここはストリートだし、それなりに走り込んでコースも知ってるはずだから、余裕がなくなるなんてことはまずないのに…)。

花丸「まさか、相手の作戦…?」

第2部 第10話 ヨハネ覚醒

ーギヤラリー通過の少し前ー

善子「この調子で前の車も追い抜く！」

チカツチカツ

善子（なに、パッシング？ヨハネが速いからって負け惜しみしてんじゃないわよ!!）
あんた達ふたり、仲良くこの墮天使ヨハネの後ろを走るといいわ！

ググツ

フヴォアアアアアアアア
!!!!!!

フオオオオオオオ ヴオアアアアアアアアアア
!!!!!!

善子（後ろの車、急に音が大きくなった…!!!!!!）
どういうこと？

善子「つて！追い上げてきてる!？」

善子（ここで追い抜かれてちやたまんないわ！さつさと前の車をつ！）

ヴォアアアアアア
!!!!!!

善子「追い抜けない!!」

ヴアアアアオオオオ　　パパパン!!!!
やっぱりこのコーナーも被せて来たわね……でも!

善子「見てなさい!」

インに付く……と見せかけて!

キュキュツ!!!

善子「読まれてるー!?」

にこ「甘いわよ!!」

ヴオアアアアアア

善子「や、ヤバイ!!! 詰められてる!!!」

にこ「焦ってる焦ってる……さあ、そんな運転で走り切れるのかしら?」

後ろから追い詰められてるのに、前を追いつくこともできない! 例えるなら、凶悪犯に追いかけてるのに前が行き止まりで、ジリジリと追い詰められている気分!

善子「くううう! 退いてよ! 退きなさい! 退くのです!!」

真姫「……終わりね。」

にこ「今よ真姫! 退きなさい!!」

追い抜かせて、二人の『射程範囲』に入った瞬間、退くことも追い抜くこともできない『檻』の中に閉じ込めて、じわじわとプレッシャーをかけて墮とす…！例えるなら追い込み漁！入ったら最後、絶対に逃げられない！」

ルビィ「お姉ちゃんの願いは叶えられないけど、ルビィだけでも逃げ切って、善子ちゃんの仇をとるよ！」

にこ（あのアリスト、速い！ATのくせになかなかやるわね…姉譲りのドラテクみたいね。）

「でもね…この『Cutie Panther』からは逃れられないわよ！」

花丸「善子ちゃん!!」

梨子「まさかスピンしてたなんて…！」

花丸「マルのせいじゃあ！マルがバトルしてみないかって誘ったせいで…！」

梨子「花丸ちゃんのせいじゃないわ。まずは善子ちゃんの無事を確認しましょう？」

ヴォボボボ…

善子「…」

花丸「善子ちゃん！大丈夫ずら!？」

善子「…ええ。大丈夫よ。」

梨子「綺麗にスピンのたのね、車の方はダメージないみたい。でもここは大事を取ってリタイアした方がいいんじゃない?」

善子「…いいえ、走るわ。」

花丸「完走するのも大事かもしれないけど、こんな事になってまで走る必要なんてないぞら!」

梨子「そうよ!また無理してクラッシュでもしたら!」

善子「大丈夫よ。一人残らず墮としてくる。」

梨子「無理よ!今のあなたの技量じゃ、とてもじゃないけど追いつけない!だから…」

「いいえ。必ず追いつくわ。」

花丸「!?!」

フヴオン!! フヴオオオアアアアアアアア!!!

キャキャキャキャ
!!!!!!!

梨子「善子ちゃんやめなさい!!」

花丸（さつきの善子ちゃんの目、今まで見た事ないくらい、ゾツとするほど冷たかった…いつもの善子ちゃんじゃない!善子ちゃんに何かが起こってるの…?）

ヴオアアアアアアアアアア
!!!!!!

カッ!!

にこ「??」
!!」

ヘッドライトの光!? 一般車にしては速すぎる… 乱入? いや、それならオフィシャル
がとつくに止めてるはず… 一体どういらことなの?

フオヴオアアアアアアアアアアアアアア

は、速い!! 速すぎる!! どんどん差を詰めてくる! 一体何なのよ!

にこ「真姫! 作戦は一旦中止よ! 乱入者が来てる。」

真姫「! 分かったわ。場合によってはそっちから片付ける?」

にこ「ええ。というか、ターゲットを後ろの車に変えるわ。バトルに水を差されたんだもの。」

どこのどいつか知らないけど、オーバーテイクしなさい。アンタを脱出不可能な檻の中に招待してあげるわ!

フオヴオアアアアアアアアアアアアアア

にこ「なっ!!!」

!!!!!!!

この車…

さつき墮としたはずの、SLじゃないの!!

なんてこと!あそこでスピンして再起不能だったはずなのに、ここまで追い付いて来たわけ!?一体、どんなスピードで走ってきたのよ!!

にこ「真姫!!コイツはにこひとりで抑えるわ!」

このドライバー、只者じゃない!電子制御で完全武装した911の本気で、この車を迎え撃つ!

ヴオオオオオオオオオオオオオオオオ

にこ「並んだわよ...!アンタは大人しく、911のテールランプだけ眺めてればいいのよ!」

「.....」 ググッ

ゴアアアアアアアアアアアアアアアア

にこ(なっ!ここから更にアクセル踏むの!?度胸比べってわけね...一度墮とされた

くせに...)

にこ「生意気なのよッ!!」

ヴアアアアアアアアアアアアアアアア
!!!!!!

もうそろそろ仕掛けようかしら…
ルビィ「車に乗ってても伝わるこの雰囲気…いつ仕掛けてきてもおかしくない！」

真姫「今よっ！」グッ

ヴァアアアアアアアアア
!!!!!!

ルビィ「来たあ!!」

！
インは絶対に開けない！お姉ちゃんのために！善子ちゃんのために！絶対勝つんだ

バアアアアアアアアアア
!!!!!! キュキュキュツ!!!

真姫「くっ…」

失敗か…でも今ので、相手のタイヤはもう限界が近いのがよく分かったわ。ゴールももう近いし、次かその次でチェックメイトね。

カッ!!

ヘッドライトの光…にこちゃん…

フヴォアアアアアアアアアア
!!!!!!

気付いたら、朝だった。

バトルの途中、相手からのプレッシャーでスピニングからの記憶がない。バトルの結果は……って、どうせ負けたんでしょね。

善子「学校……行くかあ……」

曜「善子ちゃん、おはよう。」

善子「曜……うちの前で会うなんて珍しいわね。」

曜「一緒に学校行こ。善子ちゃんと話したいこともあるし。」

善子「ええ、いいけど。話すことって、もしかして昨夜の？」

曜「うん。実はね……」

善子「……えーと要するに、バトルには勝ったけど、その後私がルビイの車を田んぼに落として、そのまま走り去ってしまったと……」

曜「そういう事。クラッシュって言っても、自走はできたから大丈夫なんだけどね。

善子ちゃん、あの時どうしてスピードを緩めなかったの？」

善子「うーん……そう言われても、その記憶どころかスピニングしたところから全く記

憶がないのよね…」

曜「そうなの!? 対戦相手の人も『まるで別人みたいな走りだった』って言ってたし、不思議だね。」

善子「そんな事よりルビィよ! 学校には来るの?」

曜「昨夜聞いた時は『何ともないから行く』って言ってたけど…」

善子「だったらこうしちやいられないわ! 早く行かなきゃ!」ダッ
曜「ええ!? ちよ、置いてかないでよ!」

ガヤガヤ…

善子「ルビィ!!!」ガラガラッ!!

「えっ、誰あの子?」

「すごい美人…!」

「他のクラスの子かなあ?」

「あんまり見たことないね」

ルビィ「あ! 善子ちゃん! おはよう!」

善子「ルビィ!!!」ダダダッ

「ケガは？つて、おでこ怪我してる！」

ルビイ「軽くぶつけたただだから大丈夫だよ！そんなに心配しないで！」

善子「するわよ!!ごめん、ごめんねルビイ！私のせいで……！」ダキツ!!

ルビイ「ピギイ！ちよ、善子ちゃん、みんな見てるよお……！」

善子「構わないわ！よかった……！ルビイが無事で本当によかった……！」ポロポロルビイ「うゆゆ……」

花丸「大胆ずら……。」

梨子「今まで保健室に来るのがやつとだったのに、こうもあつさり教室に入れちゃうんだから、よっぽど心配だったんでしようね。」

千歌「でも、それだけ大事に思える友達ができたのつて、とつてもいいことじゃない？」

曜「よろし！じゃあ今日の放課後は、善子ちゃんの初勝利と初登校をお祝いして、松月でスイーツパーティーだ！」

花丸「善子ちゃんとルビイちゃんにも伝えてくるずら！」

花丸「善子ちゃんルビイちゃん！今日の放課後、みんなでお菓子食べよ！」

「うん!!」

……
フアアアアアアアアアアアア

果南「お、後ろから速そうなのが来るよ。」

鞠莉「ワオ！とつてもシャイニーな音ね！ちよつとついて行ってみない？」

果南「無茶しないの。ゆつたり走る方が性に合ってるでしょ。」

鞠莉「それもそうね。」

フアアアアアアアアアアアアアアアア……

果南（FDかぁ…… かなりいじつてあるなあ。）

ー日本平PAー

果南「鞠莉は何飲む？アタシ買ってくるよ。」

鞠莉「果南ったら優しいのね！じゃあエスプレッソお願い！」

果南「はいよ。」

果南（あ、さっきのFDだ。ここで休憩してたんだ。）

曜「オツケー、じゃあ買ってくるね！」バタン

果南「えっ！曜!？」

なんで曜がああFDから出てくるんだろ？とりあえず曜に直接聞いてみるか……?? 「ふう……」バタン

果南「!？」

あれって……男の子、だよね……？

果南「——ってことがあったんだよ。なんかアタシちよつとショックだったよ……」

一同「ええー!!!」

善子「夜に男と二人つきりでドライブとか、それもうデートじゃない!」

花丸「曜さん、大人だなあ。」

ルビィ「知り合うとすれば、統合になってからだよね!浦の星は女子校だったし。」

梨子「まあ、誰にでも隠し事のひとつやふたつはあるものじゃないかな?」

善子「リリーがヨハネの集いに度々参加してることとか?」

梨子「ちよつと!!それ言わない約束じゃないの!!」

千歌「それにしても聞いた事なかったなあ、曜ちゃんにそんな人がいたなんて。チ力になら言つてくれるんじゃないかと思つてた。」

果南「問題はそこなんだよ。小さい頃からの付き合いがあるアタシや千歌に言わないつてとこが引つかかるんだよね。アタシは悲しいよ!今まで姉のつもりで接してきたつもりなのに何も言つてくれないなんて!」

千歌「えくでも、いくらお姉ちゃんにでも言いたくないことはあるよ。私だつて毎朝配達用のみかんつまみ食いしてるの、美渡姉達に言つてないし。」

梨子「それとこれとは話の規模が違う気が…」

果南「そこで!アタシは真実を確かめるために何としてもみんなの協力が欲しいんだよ。」

梨子「それはいいんですけど…果南さん、仕事は?」

果南「ん?あーいいのいいの。この時期うち暇だから。」

善子「こうやつて放課後に学生に混じつて集まつてるの、後輩の様子見に来たOBの先輩みたいだわ…」

果南「おつ、秀逸だね。」

花丸「ついこの前まで教室に来てなかったのに」ボソツ

善子「ずら丸今なんてったあゝ!!」

ルビイ「ピギイ! 善子ちゃんここお店だよ!」

果南「というわけで、ここしばらく曜を追っかけてくれないかな? お礼はうちで作った干物で!」

千歌「干物おゝ!? 果南ちゃん家の干物美味しいからいいけどさゝ、もつと他になんかないのゝ?」

果南「分かったよゝ、ドンキでなんか買つとくから!」

梨子「お礼の選択肢が干物かドンキしかないのは何なの…」

―別の日の放課後―

千歌「なんだかんだ引き受けちゃったよゝ。」

梨子「まあいいじゃない。千歌ちゃんも曜ちゃんの”カレシ”、気になるでしょ?」

千歌「そりやそうだよ! 幼馴染にも黙ってるなんて、全くけしからん! 絶対証拠掴むんだもん!」

千歌「あ、てかこの前のバトルってどうなったの？バトルに勝ったらダイヤさん、言うこと聞いてもらえる約束だったんでしょ？」

梨子「それが、『三人とも応援してます、これからも頑張ってください』ってオドオドしながら伝えたつきりで何もお願いしなかったのよ。」

千歌「変なの。どうしちやつたんだろうね。」

曜「千歌ちゃん梨子ちゃん！おまたせ！日直の仕事長引いちゃった！」

千歌「あ！曜ちゃん!!」

梨子「いいのいいの！私達も今来たところから！」

千歌「一緒に帰ろ！」

曜「うん!!」

曜「じゃあ私、ここで降りるから！」

一同「じゃあね！」

ブロロロロロ……

千歌「今日も一日楽しかったね！」

梨子「そうね。でもなんか忘れてるような……」

「……………」

「ちかりこ「あ、っ!!」

「夜、渡辺邸周辺」

善子「全く、あの二人は何やってんだか……」

花丸「善子ちゃん家が近所じゃなかったら計画失敗してたすら。」

ルビィ「善子ちゃん家にお泊まり会と称して曜さんの追跡……なんだかワクワクするね！」

善子「言われてみればそうね……夜の闇に紛れてミッションを遂行するスパイみたい……なんかカッコイイ！」

花丸「あつ、曜さんが出てきたすら！」

ルビィ「あんなに嬉しそうに、どこ行くんだろ……」

善子「ルビィ、ずら丸！追跡するわよ！」

ルビィ「大通りのコンビニまで来たけど、もしかしたらお買い物に來ただけだったんじゃない……」

善子「うぐぐ… その可能性は否めないわね…」
ヴアアアアアアアア…

花丸「ずら！この音はもしや！」

ルビィ「マツダ RX―7だ！」

ヴォボボボボボボボ…

善子「コンビニに入ってきて… 曜さんが乗り込んだ！」

善子「ルビィ！あんたドライバー確認してきなさい！」

ルビィ「分かった！」

花丸「バレないように気を付けるぞらよ！」

「オラたちは駐車場の隅で夜中にたむろす不良っぽくして様子を伺うぞら。」

善子「こら！女の子がそんな座り方すんじゃないわよ！」

花丸「アアン？なんか言ったずらかア!？」

善子「余計目立ってるわよ！」

ウオオオオオオオオ…

ヴォオオオオオオオオ…

花丸「あれ？この二台って…」

バタン

にこ「あれ？アンタたちこんなところで何やってんのよ？」

真姫「女子高生がこんな時間にコンビニにたむろすのはいただけないわね。つて言っても、もつと悪いことしてるんだけどね。」

よしまる「にこさん真姫さん!!」

花丸「東京に帰ったんじゃないやなかったんですか？」

にこ「長い休みをもらってるから、あと2〜3日は滞在しようと思ってるよ。」

真姫「沼津で新しいブランド米が出たから、買ってきてつて友達にも頼まれてるしね。」

善子「変わったお友達なんですわね……」

にこ「それで？アンタたちは何してたのよ？」

花丸「それが……色々と込み入った事情がありますわ……」

キユウウウウ　　ヴァツババババババババババ!!!

真姫「ロータリー？あんなのいたなんて気付かなかったわ。」

ルビィ「善子ちゃん花丸ちゃん！あの車が出ていくよ！やっぱり男の人だった！つて、にこさんと真姫さん!!」

にこ「ターゲットはあのFDつてことね。分かったわ。アンタたちふたり！分かれて乗りなさい！」

よしまる「ええ!？」

にこ「追うわよ！」

真姫「はあ……面白そうなことにはすぐ首突っ込むんだから……」
バタン!!

ウウオオオオオオオオオオオ!!!

ヴオオオオアアアアア!!!

ルビィ「……え!?ルビィは!?置いていかないでよぉ!!」